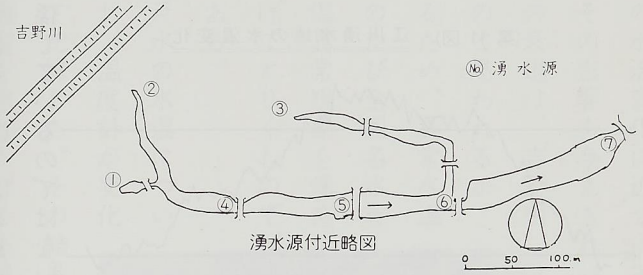
第三章　名水百選に選ばれたわけ

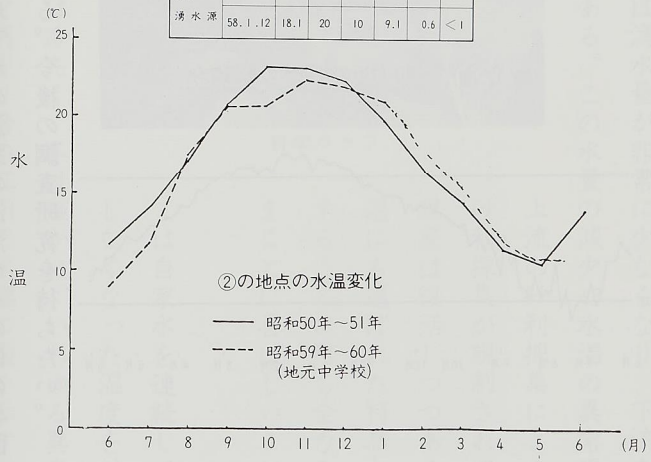
（第 13 図）



湧水源付近略図

水質測定結果（県資料）

調査地点	調査年月日	水温 (℃)	水深 (cm)	流速 (cm/S)	DO (mg/l)	BOD (mg/l)	SS (mg/l)
No.1 湧水源	57.11.12	17.9	10	5	11	—	1
	58.1.12	7.2	5	0	12	—	—
No.2 湧水源	57.11.12	22.2	30	3	8.3	<0.5	<1
	58.1.12	18.1	20	10	9.1	0.6	<1



最近の公共用水域における水質のよごれの状況も総体的には改善されつつあるが、生活環境の保全についてはまだまだ環境基準に達していないのが現状である。したがって水質保全は私たち人間にとってこれほど大切なものはない。生活に直結する身近かな水が清澄であることほどうれしいものはないのである。

水は生命の源であり、人間をはじめ地球上の生きものにとって欠くことのできない大切なものである。近年「うまい水」「おいしい水」として、天然の水が各地で販売されているようである。これも自然の水の清澄さをみんなが希望している気持ちのあらわれからである。自然の水の中には昔から名水として引き継がれているものもたく

雪の日の北の湧水口

さんある。

私たちの町の江川の湧水も昔から飲み水・炊事、洗濯にも使われ、また農業用水にも大いに利用され美しく冷たい水として重宝がられてきた。またこの水を満水にした江川の遊園地の池にはボートを浮かべ行楽のだいじな役目を果してきた。その上、夏は十度、冬は二十度を越える水温で真冬に睡蓮が咲くという珍しい自然現象がみられ、昔はこの水に西瓜・ビールなどを浸けて冷やしたものだ。こうした異常水温が現在も湧水源地帯では見られ、全国でも類をみないものとして学界からも注目されている。

このことで昭和二十九年八月六日、県天然記念物として指定され、この湧水を利用して遊園地のレジャー施設もつくられ、流れの中で多くの鯉が泳ぎ行楽の人々の目を楽しませ心をなぐさめてくれるだいじな水資源であり、このたび環境庁より全国の「名水百選」の仲間入りをしたわけである。

第四章　江川の諸行事

1、遊園地そのうつろい

吉野川遊園地のことを、いまでも「江川遊園地」と、昔の名前でよぶ人が多い。

そのほとんどが、大正か昭和初年生まれの中老年者で、「江川遊園地へでも行くか。」などと、孫をさそってその失笑をかっている。

吉野川遊園地は、阿波のディズニー・ランド的存在で、今のこどものかっこうの遊び場であり、中老年者には思い出の地である。吉野川の中下流域に生まれた人なら、一度や二度は遠足などで、江川遊園地にきている。なかにはここで見合いをしめでたく結ばれた人もある。そん

昔の江川遊園地

な思い出の深さが、江川遊園地と昔の名前でよばせるのであろう。

吉野川の築堤工事で廃川敷となった今の地を、遊園地として開発し、県民に憩いの場として無料開放したのは、実業家工藤鷹助氏である。

氏は当時乗降客がすくなくて、廃駅の運命にあった西麻植駅存続のため、私費を投じて遊園地を作ったといわれている。また氏は、乗降客確保のため吉野川に木橋を架け、阿波郡八幡町（現市場町）との交通の便をはかったとも伝えられている。

むろん、あそこから湧出する泉によって、自然にかたちづくられた地形のおもしろさや清らかな水の流れ・水温が夏は摂氏十度と冷たく、冬は摂氏二十度と暖かい特異現象をおしむ気持ちが下地にあったことはいうまでもない。

遊園地の造成工事は、昭和三年一月に始められ、四年の歳月を費して一応の形を整え、昭和六年十一月に開園した。開園後も毎年工を加え不足を補な

った。その間私費を投じること二十数万円と伝えている。なにしろ米一石（約一八〇リットル）二十数円の時代である。今の米価で換算すれば五億円を超え、労賃比でいえば三十億円を超える驚くべき数字になる。

そのころの江川遊園地のようすと、岡本対南氏は、その著「花竹秀聞録」の中で、次のように描写している。

面積二万坪（約六・六万平方メートル）、地に高低あり径に曲直あり、四時の花木各々区を分って位置を占め、酒楼あり、茶亭あり、衆人の会館から児童遊戯の器具に至るまで備わらざるはなく、清川一碧、潭々としてその下に流れ、群魚躍り短艇浮かび、朱橋影を波上に漂わし、明媚の景、画中の趣あり。

江川遊園地時代、入園者がどれだけあったかは、入園が無料ということも

あって明らかでない。が、当時園内には、うどん・そばなどを売る大衆食堂が一～二店、酒食を供するやや高級な食堂が一、駄菓子などを売る売店が一～二店あり、常時開業していたことから考えると相当なにぎわいを見せていたと考えてよかろう。

柳月亭付近の景観

いうまでもないことだが、春秋のころには、江川会館や催し館で映画の上映、ドサ廻り劇団の公演、浪曲大会や演芸会などを、広場でのサーカス興行などを行い、入園者の増大、ひいては西麻植駅の乗降客確保につとめた。また、蛍狩り、花火大会などを開き、夏の夜の水の面にいろどりをそえた。

児童公園や動物園が県内のどこにもない時代であり、テレビやパチンコはそのもの自体がない時

代である。県民憩いの場、レジャーセンターとして、遊園地がはたした役割の大きさは、今の若い人々にはちょっと想像できないのではあるまいか。

ところで、昭和六十年十二月九日の徳島新聞鳴潮欄に、つぎのような文が掲げられていた。

筆者が開戦の臨時ニュースを聞いたのは小学一年生の時だ。大人たちは興奮して歓声をあげていた。

隣家の主人が戦死したのは、その翌日だ。

出征の何日か前、彼は妻子と私を誘い遊園地で遊んだ。最後の楽しい一日も妻はただ涙だった。

この文は、今でも江川遊園地と昔の名でいうおじいちゃんやおばあちゃんには、いたいほどよくわかるが、若い人にはちょっとわかりにくい。その解

釈はおじいちゃん、おばあちゃんにおまかせしたい。

ここに出てくる遊園地は特定する固有名詞がないのだから、いちがいにはいえないが、徳島県人が徳島の新聞に掲げた文章である以上、江川遊園地と考えてまちがいあるまい。

さきの第二次世界大戦は昭和十二年七月七日、中国で起こったが、しばらくの間は日本と中国だけの戦争だった。

アメリカ・イギリス・フランス・オランダなど世界を相手とする大戦となったのは昭和十六年十二月八日で、この文は四十四年前の開戦の日を追想したものである。

四十何年か前の江川遊園地は、表面的にはなんの変化もなかったが、この文はこの日以後にふりかかる暗い日々を予言するようで興味ぶかい。

江川遊園地が大きくすがたをかえたのは昭和十八年に入ってからである。その年のはじめ、遊園地は「江川県民修練所」という、いかめしい名前にか

えられた。県民修練所というのは、明日は兵となり戦場に向かう青年に軍事訓練を施す所で、いってみればミニの兵営である。県内から選んだ五十人の青年を兵として役立つように訓練した。

当時修練所の教官だった徳島市国府の岩野忠行さんのお宅には、修練生の修了記念写真が九枚ある。訓練期間は五十日だったから、県民修練所は昭和十九年の中ごろまで続いたのではと、岩野さんはいう。「訓練生の五分の一、約百人は戦死し、帰らぬ人となった」とぽつりとつぶやいた。生きていればなん人かのお孫さんに親しまれているであろうに。

十九年の中ごろからは、体がわるくて現役を免除されていた二十歳以上の男子を訓練するようになった。そして、それもしばらくで、やがて本物の軍隊の駐屯地となった。連合軍上陸に備えてである。遊園地が兵営となったからといって驚くに価しない。海沿いの学校は校舎の一部が兵営となり、兵が寝起きしていたころである。そのころ、教室を兵にうばわれた生徒は午前と

午後にわかれ、一つの教室を交代して使っていたのである。

その頃物資は極端に不足していた。そのためもあり、無暴にも兵は遊園地の花木を切り、川の鯉などをとりつくした。せっかくの名園も、むざんに荒廃し見るかげもなくなった。そして敗戦の日、八月十五日をむかえた。

戦後、空襲で教室を焼失した徳島師範学校（徳島大学教育学部の前身）の代用校舎となったこともある。ここで勉強した先生も町内には何人かいるのではあるまいか。

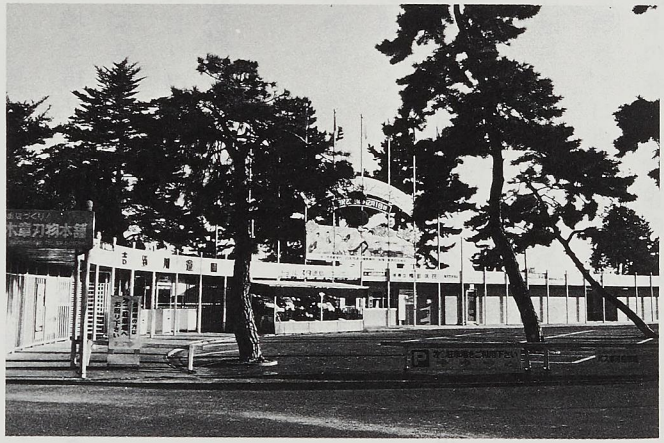
遊園地の受難はまだつづいた。荒野となった遊園地に目をつけた一部の人々は、これを農地として開放するよう求めてきた。いわゆる農地開放闘争である。しかし、これは遊園地復活を望む人々に軍配があげられ、遊園地の経営権を工藤氏から財団法人江川保勝会に移すという条件で、昭和二十三年十一月めでたく落着した。

おなじころ、今の新開地の一部が農地として開放され、やがて市街地にか

わったことを思うと、きわどい一瞬であったといえよう。

かくて人々の努力によって遊園地はみごとに復興され、県民憩いの場、レジャーセンターとしてゆるぎない座を占めた。

今はやりのことばでいえば、水と緑のキラメク江川遊園地の有望性に着目したのは徳島新聞社で、昭和四十四年の春、四国大博覧会を開くに当り、ここを第二会場とし、新しい遊具などを加えた。この企画はみごとに的中し、博覧会は連日おすなお



吉野川遊園地の正門

すなの盛況であったと伝えている。

徳島新聞社の系列会社徳島興発が遊園地を借りうけ「吉野川遊園地」と名を改めたのは、博覧会の後いくらもたたないころである。

2、慰問映画製作と出征兵士留守家族慰問演芸会

(1) 慰問映画製作

ここに一枚の感謝状がある。

感謝状

今次大東亜戦争ニ際シ将兵慰問ノ為恤兵映画ノ製作ニ協力セラレ感謝ニ堪ヘス茲ニ深甚ナル謝意ヲ表ス

昭和十九年六月

海軍大臣　嶋田繁太郎　㊞

深見定一様

これは、日本軍の敗色がこい昭和十九年の春、海軍省のよびかけで製作した、出征兵士慰問映画「四国だより徳島の巻」に自ら出演するだけでなく、物心両面にわたって尽力された、西尾村飯尾（現鴨島町飯尾）の深見さんに贈られた海軍大臣からの感謝状である。

慰問映画は、戦陣の将兵になつかしいふるさと四国の山野のたたずまいや人々の日々のいとなみを知らせるために製作された。この映画の一つの柱である出征兵士留守家族慰問演芸会の会場風景は、ここ江川遊園地で採録された。

その日遊園地は花のさかりのころであった。咲きほこる桜の花も画面におさめられている。三月の終わりか四月のはじめごろであろう。留守家族の目や耳を楽しませる演芸は、阿波を代表する芸能の一つ「人形芝居（デコ）」であった。

人形芝居は、浄瑠璃（物語の筋やせりふに節をつけたもの）を語る太夫、

人形浄瑠璃

三味線弾き、人形づかいの三者が一体となって演じる演劇である。人形芝居は西宮（兵庫県西宮市）の道薫坊によって創始されたといわれている。地理的に近いこともあって、徳島県は淡路島（国指定無形文化財）などとともに人形芝居の盛んなところであった。そのため、しろうとのなかにもプロ顔まけの芸達者が多かった。当日の出演者も、太夫や三味線の奏者は、西尾村を主とし隣接町村の同好者から、人形づかいは県内各地からその道の芸達者が選ばれた。

会場は江川会館西がわの広場で、昔なつかしい野芝居スタイルの舞台が特設された。舞台と楽屋は掛小屋づくり、観覧席は地面にむしろ、上敷きなどをしきならべるという野趣あふれるものであった。会の運営は、西尾村と深見さんの共催というかたちをとっていたが、そのほとんどが深見さんを中心とする人々の手にゆだねられた。

人形芝居の外題は、戦時中ということもあって、勇壮な「安達ヵ原三段目、太夫深見定一（巴竜と号した）、大閤記十段目（太夫石原喜一）などが選ばれた。

招待客は西尾村だけでなく、かなり広範囲の留守家族に案内されたようで阿波郡や名西郡の留守家族も姿を見せ、五百人近い人々が終日人形芝居にうち興じたと伝えている。

慰問映画は、人形芝居のさわりの部分や観劇をたのしむ人々の姿などで構成されていたが、名場面でわきたつ留守家族の表情は、群像として小さく写

されたり、瞬時に暗転したり、オーバ・ラップ（二重うつし）するなどして、留守家族の顔がどこのだれそれの「かあちゃん」だとわかるような場面は、ただの一シーンもなかったといわれている。戦陣の兵士に、みょうな里心を起こされてはならないという、上からの命令があったとも伝えられている。

この映画を見て感激した兵士も多かったようで、内地に帰ってから直接あるいは手紙で、深見さんたちに礼をいう兵士も多かった。

なお「四国だより・徳島の巻」の総括責任者で、演出も担当したのは林鼓郎氏。その林鼓郎氏が、「四国だよりの圧巻（書物・楽曲・催し物などでもっともすぐれた部分）は江川の人形芝居であった。」となにかに書いてあったのを見たが、新聞だったか著書だったか、まるっきり記憶にないのが残念と深見さんは話を終えられた。

(2) 出征兵士留守家族慰問演芸会

昭和十二年七月から昭和二十年八月まで八年の長きにわたってくりひろげ

られた第二次世界大戦は、わが国の総力を戦いにむけて結集したもので、国内いたるところにひずみを生んだ。とりわけ、戦陣に夫や子を送り出した留守宅の幼な子をかかえた妻や年老いたふた親たちの苦労はなみたいていではなかった。

その留守家族の心やからだの疲れをやすらげ慰めるために、留守家族慰問演芸会が江川会館でしばしば催されたという人がある。来賓の松島うた子さん（歌手）につきまとった記憶が今も新しいといい、また飯尾の深見定一さんの義太夫独演もあったともいう。演芸会についてのよりくわしい情報がえられるのではと思い、その深見さんにおたずねした。義太夫独演はどうであろうか、どうも記憶にないが、こんなことがあったと話して下さったのが前記慰問映画製作のことである。

深見さんの義太夫独演はともかく、慰問演芸会が江川会館で開かれたということは、他にも証言する人があり誤りないように考えられる。

3、いろいろな研修会

(イ) 県・郡・市町村青年団幹部研修会

今はこわされているが、北側に平屋の大講堂があり、県下各地より幹部が集合して研修に思う存分活用をさせてもらった。「剣山聳えて天を摩し」と団歌を歌い、ゲームを取り入れての研修には若人のやる気も高まる。特に西尾村青年団は故人であるが、須見徳実さんが団長であり、郡連合青年団長でもあり、その団長を補佐する役員たちの協力もあって、県下に誇りうる団体であった。その原動力も一にかって遊園地のたまものかと思う。文書教育、増産運動に、出征兵士への慰問袋の発送、開墾地作業など数々の事業を遂行したものである。

(ロ) ボーイスカウト四国大会

ボーイスカウト四国大会も開催された。「そなえに、つねに」のモットーを守り、いつでも世のため、人のために役立ち、世の中になくてはならぬ少

年になろうと、日夜努力しているボーイスカウトは、四年に一回の四国大会を四県が交替で開催している。第三回の大会を昭和三十二年八月二、三、四日に江川遊園地を会場にして開催した。参加人員八五〇名であった。キャンプファイヤーは、鴨島第一中学校グランドで行ったことは、少年達の思い出の一つである。芝生の上にテントを張ることは思いもよらぬ幸せな場所であった。昭和三十九年八月八、九、十日の二泊三日も同様、江川遊園地を会場に選んだことも不思議ではない。一四五〇名の飯盒炊事の水は、中央より湧き出る水（保健所の検査の結果良好）を使ったことだけでも遊園地の水の良いことが分るのである。

(ハ) キャンプ活動

野外活動の「キャンプ地」としても度々利用された。

文部省は、昭和二十九年六月、青少年に大自然の中で生活させ、協同・奉仕・創作活動をするために、キャンプを取り入れて「教育キャンプ」の名で

実施することになった。そのため、中央で受講した人が中心に実施することになった。その候補地が江川遊園地となり、夏休みに県下中学校のリーダーを集めて行われた。松の木の下、芝生の上にテントを張り、夜の静かさの中でのキャンプはとても楽しい集いであった。

(二) 幼稚園の研修会

麻植郡幼稚園の研修会もここで行われた。夏休みを利用して幼稚園の理論と実技の勉強会を、昭和三十年より毎年行った。柳月亭で食事をし、夜はテントの中で、ある時は芝生の上でゲームするなど、とても楽しい勉強会で、参加した人にとってはなつかしい思い出となっている。

(ホ) 県民修練所

当時の青少年は日支事変も深入りするにしたがい食糧事情などの関係もあり、その体格も衰えて来たので昭和十七年度より筋骨薄弱者、虚弱青少年の心身の鍛練の目的をもって県は徳島・鳴門・日和佐・三野とここの江川と

に「県民修練所」を設けて多くの青少年の育成を図った。特にここは他の地区と違って環境も良く、宿泊所も広大で共同炊事の施設も充分であったので多くの青少年を育成し多大の成果をあげた。

4、江川遊園地とスポーツ

遊園地が出来た頃はこの田舎にもようやく野球熱が盛んになりつつあった。その下地として庭球熱が盛んで鴨島にも暁クラブ、飯尾には田園クラブ、西麻植には禅麓クラブ、知恵島地区には知恵島クラブなどのチームが出来、特に鴨島の暁クラブでは強豪ぞろいで県下の大会では何時も他を圧していたが、特に川真田、川真田組は有名で国体でも大活躍をしているから同じスポーツである野球が盛んになる素地は充分出来ていたのである。

当時はまだ六大学リーグ戦が華やかで現在のプロ野球のように、ファンは

その勝敗に一喜一憂し、また中等学校の野球もしだいに盛んになり全国大会には熱狂してファンは仕事も手につかないといったような状態になっていた。

プロ野球も昭和十年に結成されたのであるが、それより前に読売巨人軍が編成されアメリカ遠征をしたり、またアメリカのプロ野球の代表団を呼んだりして、その快速野球投手のグローブの魔球に酔い、ホームラン王ベーブルースや強打者ゲーリッグの猛打に驚嘆し、遊撃手モランビールの軽快な守備に目を見張るなど野球熱もいやが上にもこの田舎にさえ伝わって来た。

麻植中学校も創立二年目から硬式野球部が出来、小学校も川島・鴨島・西麻植・飯尾敷地・柿島などがチームを作り、社会人も高越クラブ・川島城山クラブ・西麻植ドラゴンズ・鴨島暁クラブ・飯尾田園クラブ・石井クラブなどが誕生し、日曜・祭日ともなると練習試合や大会が各地で催された。

ここの江川遊園地も現在の正面入口、駐車場付近がグランドであり、経営者工藤鷹助氏の好意で自由に使用出来た。ちょっと狭かったが当時のボールは現在のボールに比較して反撥力が弱く余り飛ばなかったので結構使用出来た。

またここの球場で大会を開催すると遊園地の行楽客が多い時は球場のまわりを取り巻く位であったので熱が入った。社会人では各チーム互角であったが、小学校チームでは鴨島が生徒数がずばぬけていた関係か一番強く

昔のグランド跡

て各チームとも鴨島を目標に戦ったが追い越すことが出来なかった。
思い起こせばここの球場で走ったり打ったりしてはしゃぎまわった生徒や社会人も生きている人は六十歳以上である。しかもこの球場で野球をしては腹をへらし、江川食堂でうどんをかっこんでは、また練習したり、ボートに乗ったりしてははしゃぎまわって、青春を謳歌した想い出のグランドである。

またこの運動場では年々工藤館蚕種合名会社の秋季運動会が開催された。工藤館は昭和初期は蚕種の製造高が日本で第三位といわれるぐらいに成長して、従業員も五百人余りいた。田舎としては驚異的な活況を呈し、当時の就職口の少ない不況時に多くの人達に生活の糧を与えたことは功労者として大いに称讃すべきであるが、その従業員の大部分が女子で、独身の娘さんがほとんどであったので、運動会となると特に華やかで、真白い脚を真赤な腰巻の下から出して走るさまは何ともいえない妖艶なものであった。

またこの運動場や現在の演芸場のある広場では、たびたび県下の会社などが一日の行楽をかねて運動会を開催していたが、その人達もいい想い出として残っているにちがいない。

5、江川のホタル

美しい夕日が静かに西の空に沈み夜のとばりが下りてくると
ホーホー蛍こい
あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ
のわらべうたや
ほたるの宿は川ばたやなぎ

やなぎおぼろに　夕やみ寄せて
川のめだかが、夢みるころは
ほーほーほたるが灯をともす
の童謡、それに小学唱歌の
　蛍の光、窓の雪
　ふみよむ月日かさねつつ
　いつしか年も過ぎのとを
　あけてぞ今朝は別れゆく

子供たちの歌が聞こえてくる。「ああきれい」「「ほんとに美しいなあ」「ようけでとるなあ」「そうじゃなあ」「今年も大分でで来たがこの調子じゃいつもより多いかもしれんで

江川の蛍狩り

よ」と付近の人々は見とれて讃美の声を発する。この付近の人々にとっては、てんてこまいした春蚕が済んで桑の株切りも終わって、心も体ものんびりとしたつかのまの一休みといった時が、ちょうど蛍が出始める時である。

遊園地の北方や西方が竹藪であった頃、毎年時期が来ると、その竹藪の中は何万何十万という数知れない蛍が群生して、その放つ光が竹の幹や葉を青白く浮き立たせて、あたかも不夜城のように明るくなる。

北の方には周囲三百メートルもあろうかと思われる河跡湖があったが、昼なお暗い竹藪に囲まれて青黒く濁っていて、人々は気味悪がって近寄ろうとはしなかったが、水が流れないため、冷たい湧水がおさえられて水温が割と高く、また西の川跡も浅くて夏も太陽の熱をうけて冷たい湧水があっても、ずっとは冷たくなかったので、両方の池ともに蛍の寄生するカワニナの貝が繁殖して、蛍にとっては好都合であった。北の方は人も近寄らなかったくらい気味悪かったり、近くの人や子供たちも家から眺めて楽しめたし、とる必

要もなかったので、蛍にとっては天国で自由に繁殖できたのである。

しかししだいに藪が切られ開墾され、また新しい吉野川の堤防が築かれるようになって、池が埋めたてられたりして竹藪がなくなるにしたがって、蛍の数も減少していった。

昭和三年に江川遊園地が建設されるようになっても、まだたくさん飛んでいたのであるが、遊園地が夜間解放されるようになって、徳島方面から行楽客がふえて乱獲したことなどもあってしだいに減少した。それで養殖を試みたり、蛍を買い入れたりして放したりしたが、今はもう数えるほどにしか残っていない。

戦前などは、蛍の時期となると、二両編成の臨時列車を運行したが、いつも満員で若い男女のカップルや親子仲よく手をとり合っての蛍見物でにぎわったことも過去の語りぐさとなってしまった。

またその頃となると、ここの水も水温が十度くらいに下がって外温との差

が甚だしくなり、じょうはつする水が霧になって、前の人の顔がわからなくなるくらいで、またその霧の中に浮かぶ蛍の幽玄な光はこの世のものでないくらい美しかった。

遊園地の蛍が少なくなって一匹幾らで買い入れ放たれたが、ちょうど子供のこづかいかせぎにもってこいで、親たちも手伝って麻名用水や、江川下流、飯尾川などから取って来ては買ってもらい、その金でバイやめんこやボールを買って遊んだことは古老たちの若い日の楽しい思い出となっている。

6、夏の風物詩——花火大会

緑の木々と水との調和のとれた江川遊園地の花火大会は、夏の行事として忘れられないものである。昭和三十年頃よりはじまったらしい。小松島市立江町市山煙火商会より出張しての行事で、日は別掲の写真から見て、八月一日（旧七夕の宵）が大会の日であったことは、第三回（昭和三十二年）ボー

花　火

イスカウト四国大会が、遊園地で開催されたので記憶にあたらしい。

緑と水との関係から、内容は「ナイヤガラの滝、火車、金魚、アルプス、まんが、吹筒」などの仕掛花火が主であった。観客は南の土手を使って、従業員十人ぐらいは中央の芝生の上に待機し作業にあたっていた。人出が多いため、入場券を発売し整理していたようであった。夏の一夜の花火大会もなつかしい思い出の一つである。

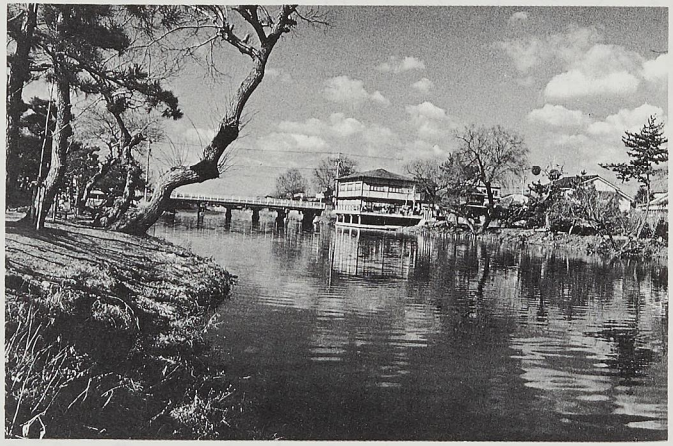
第五章　みぎわの緑

車の往来のはげしい道を、切幡寺から藤井寺へむかう旅人が、はじめてほっとくつろぐのが江川の水のほとりである。江川新橋のあたりのみぎわには、自生の柳の老樹が、そのやわらかい影を水の面におとし、木かげには何脚かのベンチが備えられている。

道のべの清水流るる柳かげ
　しばしとてこそ立ちどまりつれ

西行法師の歌は、そんな旅人の旅情を代弁するようによみとれる。

新橋付近の小公園は鴨島公園の名



江川の新橋

で知られ、近頃流行の水際公園の先がけをなすものである。みぎわに自生の柳のほか松・桜・つつじなどの緑が配され、清流とほどよく調和している。また鴨島ライオンズクラブ植栽のあやめ園には、数十種のあやめの珍種が集められていて、花のころには、そのあでやかさをめでる人でにぎわう。

江川の水域には「遊園地」の名で広く知られている児童公園がある。正しい呼び名は吉野川遊園地であるが、フルネームで呼ぶ人は極めて少ない。吉野川遊園地は子供たちに人気があり、阿波のディズニーランド的存在である。そのため休日には、子供づれのマイカーファミリーでにぎわい、駐車場にあふれた車が、近くの吉野川堤防上をうずめるほどである。

この遊園地もはじめは、江川の清流を柱とする水際公園であった。流れに鯉を放ち、水面に清楚な「すいれん」の花を咲かせた。みぎわの自生の柳の老樹を残し、周辺には、松・桜・かえで・かいづかいぶきの植え込みをつくって、人々の憩いの場としたのがはじまりである。しっとりとしたたたずま

江川の柳

いを見せる水辺には、昔の面影が少し残っている。

千曲川柳霞みて
春浅く水流れたり
ただひとり岩をめぐりて
この岩に愁をつなぐ

これは島崎藤村の「千曲川旅情のうた」の一節である。

むかしから多くの詩や短歌にうたわれているように、水辺の風情として柳はかくことができぬものである。

近頃はやりの水際公園にも、ほとんどの都市が、みぎわに柳の木を植

えてある。近い例として徳島市新町河畔にも柳の木が植えてある。

それは日本人の美意識がそうさせるように思われてならない。

ところで江川の柳だが、湧水地から鴨島公園の東西約一キロメートルには、樹の周り一メートル以上の成木が五十一本残っている。そのなかには樹周三メートル以上のものが数本ある。このように柳としては比較的老樹に属するものが、一群として残っているのは、県内では他に例がないといわれている。できるだけ保存したいものである。これらの柳の大半は吉野川に堤防が築かれる前からのものと考えられ、樹齢百年とか二百年とかいわれているがさだかでない。一度あるいは二度、三度、成木となったものを切り倒したが、その基幹部から芽ぶいて成木となったものが多いからである。また二本・三本と数えたもののなかには、同根でないかと思われるものもあるので、五十一本という本数もあやふやなものである。

吉野川遊園地内には、天然記念物とか名木という大げさなものでないが、

今後の成長を見まもりたい「桑の木」「カイヅカイブキ」があるのでその現況を報告しておきたい。（昭和六十年九月）

●クワノキ

場　所　催し館の西北すぐそば

樹　囲　約二一八センチ

高　さ　約一三メートル

樹　齢　江川遊園地開園当時の関係者は約八十年、とても百年は超えないといっている。

●カイヅカイブキ

場　所　正門ゲートを入ってすぐ右

樹　囲　約一六八センチ

樹　高　約一三メートル（一度芯を止めてある）

樹　齢　開園当時一括購入したもので他にあるものと大差なく七十年く

らいと推定されている。
地質・土壌が良かったのか格別の成長ぶりである。刈り込みをしなかったことも一つの原因である。樹皮の筋だちがおもしろく、その色が美しい。

●スイレン　九月から十月と一月から二月にかけて二度咲きをする。水温異常現象のためだろう。

●桜　老木で枯れかかっているのもある。これらは開園当時に植えたものである。最近は新しい苗木を植えている。この桜はほとんどソメイヨシノである。

第六章　江川の民話

1、ドンガン狸の恩返し

吉野川遊園地の北側一帯の、知恵島千田須賀西の堤防のあるあたりは、昔は杉林や竹林が広がり、いばらや雑木・雑草の茂る荒地であった。荒地の中に、昔カッパが棲んでいたという広さ約五反（五十アール）の池があり、土地の者はドンガン（カッパの方言）池と呼んでいた。この池のほとりに棲んでいた狸は、頭が良く、義理人情に厚い狸であった。

明治十五年頃のこと、川島の城山に城山狸という分限者の狸がいた。この狸は、狸仲間の面倒をよくみるので、人望が厚く、と言っても狸なので狸望が厚く、川島あた

ドンガン狸の恩返し

りの狸の大将であった。その狸の長男に嫁をもらう事になったので、川島はもちろん、桑村・学・山田・西麻植・粟島あたりの狸たちに招待状を出して客に招いた。特に知恵島のドンガン狸とはうまが合うので、日頃から交際をしていたから、ぜひ来てくれと特別に招いたので、ドンガン狸は大喜びで行く事にしていたが、行く途中に粟島の在所がある。この粟島に恐ろしい大きな犬がいて、いつも追いまわされているので、怖くて城山まで行けず、困り果てていた。しかし頭の良いドンガン狸は、すばらしい考えが浮かんだ。彼は西知恵島の百姓の森蔵さんに目を付けた。森蔵さんは近頃、毎日のように柿ノ原へ仕事に行っており、日暮れにドンガン池の近くを通っていんにょる。森蔵さんは豪気で腕っ節は強いし、粟島の犬などは、森蔵さんを見ただけで尾をすぼめて逃げて行っきょる！　そうじゃ！　森蔵さんに頼んで送り届けてもらおう。狸は婚礼の日の夕方、道に出て森蔵さんの帰りを待っていると、やがて足音が近づいて森蔵さんが通りかかった。狸は羽織を着た中年の男に化けて声

をかけた。

「あのう……そこを通っていんにょんのは、森蔵さんと違うで？」

「いかにもおらあ、森蔵じゃが、おまはんは誰でぞ!?」

「この東のもんじゃけんど、あんたにお願いがあるんでわ。」

ドンガン狸は、川島へ婚礼のお客に行く途中だが、粟島在所の犬がこわいので、あんたに送って行ってもらいたい。向こうに着いたら、私の友人という事でお客になり、おごっつぉうを食べてもらうけに、ぜひ送り届けて下されと言う。森蔵さんは少し不審に思ったが、義侠肌の男だったので、困っている人に助けを求められると、捨てて置けない性格だった。

「分かりました。送ってあげるけに、案内しなはれ……。」

と、ドンガン狸を先に歩かせて、付いて行った。途中で自分の家へ立ち寄り、家族の者に、これから川島へこの人を送って行くが、今夜おそくには帰ってくると告げ、仕事着の上へ羽織を引っかけて、再び狸と連立って歩き出

した。粟島の在所にさしかかると案の定、大きな犬がほえながら走り寄って来たが、犬がこわい森蔵さんといっしょに歩いているので、近寄る事が出来ず、こそこそと小さくなって引き返した。ドンガン狸は大威張りで、川島の城山へ着いた。すでに城山の神社の境内では、大勢の狸が集まって、飲めや唄えの真っ最中であったが、森蔵さんには大きな家の広い座敷の中にいる感じで、狸どもはみな人間に見えていた。城山の大将狸は、いち早くドンガン狸を見付けて走り寄ってきた。

「おお！　これはドンガンどの……よう来てくれたのう。粟島のど犬が根性悪いけに、かみ殺されはせんかと、そればっかり心配しとったぞよ！　まあまあよう来てくれた。」

「昼のうちには来れんので、まんで遅うなってしもてからに。」

「そんな事はどうでもええ、時にあの人間は誰なら？」

「西知恵島の森蔵さんちゅうてなあ、おらあ、粟島のど犬がおそろしいけに、

送って来てもろたんじゃ。川島へ着いたら、おごっつぉうを食べてもらうけにと、約束したけに、城山の兄貴よ。あの人にだけは鼠や蛇や、猫の死んだ奴は喰わさんようにしてくれ。どなんぞして、本物の米の飯やおすい物を食べさせてくれんか？」

義理がたいドンガン狸は、助けてくれた恩人に、ミミズのソウメンやイモリの天ぷら、芋虫やなめくじの酢の物などを食べさせるわけにはいかなかった。

「分かった！　おまはんを助けてくれた恩人に、タノキのおごっつぉうを喰わしたら、ドンガンと城山は、人間にもおとる恩知らずじゃと、世間からそしりを受ける。まかしとけ、悪いようにはせんけに。」

城山狸は、何か考えるところがあるとみえ、ドンガン狸に、何やらひそひそと耳打ちした。ドンガンは、森蔵さんが座っているところへ引き返すと、

「あんたは予定外のお客じゃけに、お膳が一つ足らんのでわ。じきに用意し

て持ってくるけん、しばらく横になって寝よってつかい。」

と言うので、森蔵さんはヒジ枕で横になり、お客たちの唄い踊るようすを面白そうに見ていた。狸たちはどこで覚えたのか、当時、人間たちの間で流行っている唄を、誰彼れなしに唄っている。

〽梅が枝の手水鉢叩いてお金が出るならば……

という江戸末期から流行した梅が枝。

〽富士の白雪きゃノーエ……

〽宮さん宮さんおんまの前にヒラヒラするのは何じゃいなトコトンヤレトンヤレナ……

この二曲は明治元年に作られた唄で、ノーエ節は、明治新政府に不満をいだく旧幕臣達が、彰義隊を結成し、約三千人が上野寛永寺に立てこもった時に、士気を鼓舞して唄ったのが始まりと言われている。この彰義隊は同年五月十五日、大村益次郎指揮の官軍の攻撃を受けて、たった一日の戦闘で撃破

された。宮さん宮さんの唄は、明治元年一月に、熾仁親王を東征大総督とする、薩・長・土など二十二藩の官軍が、江戸をめざして進軍していた途上で、品川弥二郎が即製で唄ったのが、爆発的に流行したものという。これは明治治代には小学校でも唄われ、全国津々浦々まで流行した唄である。

それはともかく、森蔵さんは、川島辺の衆は唄がうまいのう……と感心していた。二時間ほど待たされた森蔵さんは、仕事の疲れでウトウトしていると、

「森蔵はん、お膳ができましたけん、早うあがってつかはれ。」

と言うドンガンの声に、目が覚めて起きあがってみると、目の前に本客の膳よりもはるかに上等の料理を並べた大きな膳が置かれて、酒がそえてあり、その横には五つ重ねの重箱が、風呂敷に包まれて並べてある。

「お腹が空いとるのに、えっと待ってもろてからに、さあ早う食べてつかはれ、お帰りにはこの重箱を、おみやげに持っていんで下され。」

と言いながら酒をついでくれた。料理は、アゴが落ちるかと思うほど美味しく、当時としては特上物であった。森蔵さんが食べ始めると、今まで唄い踊っていた連中が、まわりに集まってウロウロしながら、隙があったら横取りしようとする。えいくそ！　川島辺の奴らは、どいやしい奴ばっかりじゃ！　わしが二時間もじっと我慢しとる間、酒の一杯も飲めと言わなんだくせに！　と思ったが、自分は招かれた客ではないから、怒るわけにもいかない。すると城山が急いでやって来て、森蔵さんの前に座り、目玉をむいてウロウロしている連中を叱りつけた。

「お前らはこの人のそばへ来たらいかんッ！　この人には早う食べていんでもらわにゃ、明日の朝は仕事で早う起きにゃいかんのじゃ。朝が来たら寝てしまう。お前らとは、わけが違うんじゃ！」

「へーエ？　おい皆聞いたか？　この人は朝になったら起きて仕事するんじゃと！」

と一匹が言うと、何がおかしいのか、まわりの者はドッと笑った。そして次々に寄って来て、不思議そうに尋ねた。

「おまはん、昼起きとっても、眠とうないで？」

「昼はお日いさんが出て明かるいのに、おまはんはおとろしい事ないで？私はおじみそじゃけん、昼は気色が悪うて、とても外へよう出んでわ。」

皆が変な事ばかり言うので、森蔵さんは不審に思った。

「川島辺の衆は、昼が来たら寝よんでかえ？　昼はおとろしゅうてよう歩かんとは、妙な人ばかりが揃うとるのう？　このあいだの晩、西麻植へ泥棒が入ったちゅうが、まさかおまはんらじゃあるまいのう？」

城山狸はあわてて、

「いやそのう……こいつらは酔たんぼばかりじゃけん、くそごじゃばっかり言うてからに。気にせんようにしてつかはれ。」

と言って、冷や汗をふいている。御馳走を食べ終わった森蔵さんは、城山

とドンガンに礼を言って、みやげの重箱をさげて社の境内を出た。しかし森蔵さんは、大きな門構えの分限者の家を出たつもりでいた。城山とドンガンは何やら話し合っていたが、森蔵さんを呼び止めると、二人の若者を連れて来た。

「この若い衆らが、知恵島境までお送りするけに、安心していんでつかはれ」

という。若い衆は、森蔵さんを真ん中にして前と後を歩き、粟島を過ぎて西知恵島あたりへ来ると、いとまを告げて引き返した。森蔵さんはほろ酔い気嫌で鼻唄を唄いながら、我が家へ帰った。夜も更けていて、家の者は寝ているので、みやげの重箱は戸棚へしまうと、そのままコロリと寝て、カラリと夜が明けた。

早速昨夜のみやげを取り出し、風呂敷を解いてみると、大きな五つ重ねの重箱に、美味しそうなぼた餅や寿司、おこわ、焼魚、かまぼこ、煮〆などがぎっしりとつめてあった。家族みんなで食べたあと、さてこの重箱は、近い

うちに川島へ行く用があるので、その時に返そうと思って洗って置いたところ、昼前に一人の男がやって来た。

「私しゃ、桑村の料理屋の手代ですが、よんべ（ゆうべ）川島の人が来て、特別上等のお膳と、五つ重ねの重箱の仕出しの注文がございました。急いで取り揃えて持っていんでもろたんじゃけんど、重箱は西知恵島の森蔵さん宅へ、受取りに行ってくれと申されましたんで、頂戴に参りました。」

「ああ、お宅さんの料理でしたか。どうも御馳走さんでした。なかなかようでけておりまして、おいしくいただきました。」

「しかし妙な事に、川島の人は無理な注文をしてすまんと言いながら、確かに多分の代金を支払って下さったのに、今朝見たら椿の葉が十枚ほど銭の中にまじっておりまして、どうしても一円ばかり足りませんのですわ。」

と言う。その頃の米の値段は一升が五銭で、役場の書記の給料が平均で一日十五銭。その頃は出勤した日だけ支給されたから、月俸で約三円。男の日

雇労働者の日当が約十銭。最も優遇されていた小学校の教師の月給が五円から六円ぐらいであったから、一円の不足とは大変である。森蔵さんは昨夜の出来事を全部手代に話した。さては昨夜のは狸の婚礼だったのかと分かり、不足分の金を払おうとすると、

「とんでもない！　銭を確かめずに受取ったのは、こちらの落度と主人は申しております。あんたから受取って帰ると、私がおこられますので……。」

と言って手代はそのまま帰って行った。昨夜帰る時、若い衆二匹が送ってくれたのは、客に来ていた狸どもが、先まわりをして森蔵さんをだまし、重箱を横取りしては大変と、城山とドンガンが気転を利かして、強い二匹の狸に命じて守らせたのであった。

2、だまし合いなら狸が上手

吉野川に、まだ堤防が出来ていなかった明治の末頃、西知恵島の祇園さん

（八坂神社）の北に、辰っつぁんという度胸のある男がいた。晩秋のある夜更けに、わずかな星明りを頼りに、柿ノ原からほろ酔い機嫌で帰途につき、西知恵島の堰にさしかかると、一人の若い女がたたずんでいた。

暗い夜なのに、女の顔と着物の縞目だけがなぜか鮮明に浮き立って見える。狸や化物の着ている着物の模様は、暗やみでもはっきりと見えるもの。と言う事を聞いていたから、ハハア、タノキが女に化けて出て来たな！　と思ったが、気づかないふりをして、

「おまはんよ、そんな所で若いおなご衆が、一人で立っとったらいかん！」

タノキに化かされんうちに、早う家へかえりなはれ……。」

だまし合いなら狸が上手

と声をかけると、
「わたし、いぬ道がわからんようになったん。おじさん家へいんにょんならすまんけんど連れていんで。そして今晩とめてつかい。」
と泣き出さんばかりの声でいう。
「よっしゃ。わしんくは、すぐその先じゃけん、ついて来な……。」
「ほなって、暗うて足許が見えんのに、おじさん手を引いて連れていんで。」
悲しそうに、まことしやかに言うので、辰っつぁんはこの狸を連れて帰り、家の中へ締め込んで懲らしめてやろうと思い、女の手をとって歩き出した。狸に化かされた人の体験談によると、途中で手が痛うなったので、こっちの手と握りかえて、と言うので握りかえたら、木の枝やたきぎをつかまされていた。と言う話は聞いていたから、この手は家に着くまでは絶対に離さんぞ！と思っていた。家が近くなったが、女は手を握り代えてくれとは言わない。しめた！ ここまで来ればこっちのもの、泣こうが暴れようが、なんと

してでも家の中へ引きずり込んでやろうと、なおも力を入れて握りしめたが、女は夜道が怖いから、辛棒しているように見せかけてか、いたいとは言わない。振り向いてみると、上目使いに色っぽい目で、にこっと笑ってついてくる。家に帰りついた辰っつぁんは、土間の戸をガラリと開けると同時に、
「そりゃ！ タノキを捕えて来たぞ！」
と言って、女を土間の奥へ投げ込み、同時に逃げられないように後手で戸をしめた。投げた時の感触では、思ったより軽かった。相手は本物の女ではなく、化けている小さい狸だから、軽いのは当り前と思ったが、投げ込まれた狸は打ちどころが悪かったのか、長くのびて動かない！ 明りを近づけてよくみると、それは狸ではなくて、太くて長いサトウキビであった。

3、粟島浦の大蛇

西麻植の粟島の北側に、北西に築かれた吉野川南岸の堤防は、阿波郡市場

町との境界となっており、北西一帯に広がる河川敷は、市場町分であった。現在の河川敷は、広大な牧草地になっているが、昭和四十年代までは、十六ヘクタールに及ぶ竹藪が広がり、直径十二センチの良質の真竹が生えていた。

昭和の初め頃からこの竹林をねぐらに、一匹の大きなカラス蛇がいた。真っ黒の色をしているから、からす蛇という。

日本に棲息する蛇としては中型で、成長してもせいぜい一メートル余りだが、気性が荒く、人間が石を投げたりすると、怒って追いかけて来る事は珍しくない。よく蛇に追わえられたというのは、この種の黒蛇に多く、蛇の中では一番気性が激しいようである。

筆者も青年時代に捕えてもてあそんでい

粟島浦の大蛇

る中に、手に咬みつかれた事があるが、あまり痛くはなく、毒はなかった。しかし猛烈に跳ねまわって暴れるので、油断をすると咬みつくから、捕えるのは危険である。

一般に、普通より数倍大きくなっておれば、それを大蛇と表現する。巨大化した蛇は、自らの体を人目から避けるため、人の気配を感じると早目に逃げるか、あるいは、じっと動かずにいる場合が多い。人間が蛇をこわいと思っている以上に、大蛇も人間は恐ろしいと感じているからである。よく大蛇を見かけたとか、出くわした話は聞くが、追いかけられた話がないのはそのためである。さて、粟島浦のカラス蛇は、環境に恵まれていたのと、自らの生命力もあってか、長い年月を生きて、数倍に肥大していた。

「あの竹藪にゃ、大けな奴（黒蛇）がおるぞ！」

という噂は、かなり以前から言われていた。昭和十年頃の六月。粟島の宇太郎さんが筍を取りに行ったところ、竹を伐り出した時に枝を落として、そ

の笹ばかりを積んであるところに、太い筍が頭を出していた。筍をとるためには、笹を取り除いて根元付近を折らねばならない。笹は三十センチほどの厚さであったから、彼は一度に抱えて取り除いたとたん、何んとその下に、ビールビンよりも太い、真っ黒の大蛇がとぐろを巻いて寝ていた。びんの毛が逆立つばかりに仰天した彼は、一目散に逃げ帰ったが、あまりの気味悪さに一週間ほど寝込んでしまった。

それから数年が過ぎて、また筍が生える季節がやって来た。今度は近くの竹松っさんが筍を取りに行き、かごに一杯取れたので、帰ろうとしたところ、いきなり例の黒い大蛇が目の前に横たわっているのである。胆をつぶした竹松っさんは、筍もかごもその場へ放り出し、息せき切って逃げ帰ったという。

4、ワッ！　大蛇が流れて来た！

江川が吉野川の分流となって、まだ大量の水が流れていた明治三十年頃の

秋の初め、しけ（台風）がやって来た。その頃はまだ貧弱な堤防が散在するていどであったから、大雨が降ると吉野川が増水し、満々たる濁流が野や田畑にあふれて、勝手気ままに流れる有様であった。この時のしけは中型であったので、田畑や家屋が流失する心配もなかったから、西知恵島に住む源太はんは、江川の北岸へ流木をひろいに行った。場所は、現在の江川水源地の西、約三百メートルのあたりであった。流木は、薪になる雑木から、家屋の柱や板を始め、いろいろな物が流れて来るので、それを拾うとすべて自分の物となるのであった。また上流の谷々の水を利用して流送中の杉や桧の木材が流れてくる。これら流送中の原木には、一本一本に特種な掻きノミで、材木

ワッ！大蛇が流れて来た

屋の家号やマークが刻み込んである。これを掻刻印と言い、他の業者の木材とまじっても判別出来るようにしてあった。

それらの木材を引き上げて置くと、材木屋は自分の木材に礼金を出して、引き取りに来るので、流木拾いはよい金もうけになった。だから川沿いに住む男たちは、柄の長いとび口を持って、競って流木を集めたものだった。

水泳の達者な源太はんは、力も人一倍あったので、流れに入って良い流木を集めていた。ふと、流木やゴミにまじって、変に曲った木が流れて来たので、手を差しのべて捕えようとしたとたん。木の先端がにゅーっ！と持ち上がった。ハッ!! と息を呑んでよく見ると、何んと全長が五メートルに余る大蛇が流れてきたのである！ あまりと言えば、突然の大蛇との出合いにびっくり仰天した源太はんは、悲鳴を上げると、命からがら水から這い上がり、後をも見ずにとんで帰った。

一方、こちらはその大蛇である。彼は遙か上流の山に棲んでいたが、或る

日山を下りて、吉野川の川原の茂みに住居を移して、なに不自由のない、のどかな生活を送っていた。すっかりその場所が気に入ったので、茂みでのんびり昼寝をしている中に、大しけがやって来た。そのうちに止むだろうと、つい油断をしていると、気が付いた時には、まわりは一面の濁流となっていて、山へ逃げ帰る事が出来なくなっていた。仕方がないので、近くの木に登って難を避けていたが、その木がひっくり返ったために、大蛇は濁流の中へ放り出されてしまった。さあ大変！ 急いで岸辺へ泳ぎつこうとしたが、流れが早くて、大きな図体はそのまま濁流に呑まれて行った。

早う岸に泳ぎ着かにゃ！ とあせるが、なかなか近寄れない。その中にくたびれて、泳ぐ力もなくなって来た。やっと水がよどんで、流れがゆるやかになったので、岸へたどり着こうとしたが、流れる途中で流木が体に当ったとみえ、自由が効かない。ところが幸いにも、行く手に黒い物が水面から突き出ているのを目にとめた。あれにつかまって少し体を休めようと近寄って

行くと、何んとそれは源太はんであった。幸いにも源太はんは、手を差し延べて捕えてくれようとしている。地獄に仏とはこの事か、昔の人はええ事を言うとるわえ。と思いながら大蛇はうれしさのあまり、鎌首を持ち上げて、

「おっさん助けて！」

と叫んだが、蛇の声は人間には聞こえない。すると源太はんは、何を感違いしたのか、助けるのをやめて何か叫びながら、大急ぎで岸に這い上がると、一目散に駆けて行く。大蛇はつらかった。今のおっさんは、手まで差し延べて助けてくれようとしたのに、なんで中止して、大急ぎで帰ったのだろう？大蛇は、人間の気持ちが理解できなかった。走り去る源太はんを、うらめしそうに眺めながら、また下流へ流されて行った。

5、ドンガン池の赤エリ

知恵島の千田須賀西に、柳の大木や竹藪におおわれた、ドンガン池という

気味の悪い大きな池があった。水はいつも蒼黒く濁っていて、ずっと昔はカッパの大将が棲んでいたと言われ、土地の住民の間に、

「ドンガン池で泳んぎょったら、カッパに吸い付かれて引きづり込まれるけん、あしこ（あそこ）では泳ぐな！」

と言ういいつたえがあった。この池は、吉野川の堤防工事の時に、建設省が埋めてしまって今は跡型もない。大正の頃、池を取り囲む藪に、赤エリという妖怪が棲みついているという噂が立った。赤エリとは誰かが名付けた呼び名で、それは十歳くらいの子供の大きさで、体が赤く、狐のような格好をしていた。それが池に面した藪ぎわで、人間がひざを組んで座っているのと全

ドンガン池の赤エリ

く同じように、赤エリもちゃんと足を組んで、背筋をのばして座っているのである。人間ならこの座り方は当り前で、何の不思議もないが、正体の知れない生き物が人間と同様の座り方をしている姿は、何とも不気味で、妖怪としか思えなかった。その頃も西知恵島の子供は、知恵島小学校へ通っていたが、ドンガン池の赤エリが怖いので、池の近くの道を避け、西麻植駅の南へ大廻りして通学していた。当時西知恵島に左官がいて、中須賀方面へ仕事に通っていたが、毎日のように、

「今朝も赤エリが、藪ぎわで座んりょった。ど気色悪い！」

と言っていた。

6、江川水源の水を呑みに来た大蛇

大正の初め頃には、現在の吉野川遊園地の北側一帯の西知恵島には人家がなく、雑木の生い茂った荒地であった。大正の中期になって、河野辰太郎氏

一家が入植して、遊園地の北一帯を切り開いて開墾し、砂質土壌の畑に芋や大根・麦などを作っていた。大正末期の初夏のこと、さつま芋を植えるために畑にうねを切ったが、日が暮れたので中止した。芋のつるは明朝になって植える予定だった。

江川水源の水を呑みに来た大蛇

翌朝早く、畑に出てみると、昨日整然と切ってあるうねの中を、斜めに横切る形で大蛇らしい物体が、うねを崩して文字通り蛇行していたのである。人間が物を引きずって行ったのであれば、足跡がつくが、人間や動物の足跡は全く見当らず、ただ、十センチ余りの幅をもった大蛇の這って行ったらしい跡が、くねくねと江川の水源地へ続

いていた。話を聞いて見にやって来た人たちは、この大蛇は、江川の水を飲む目的で、昨夜の中に畑の中を通過したのであろう、と話し合った。

7、江川狸はきれい好き

江川の両岸をしめる鴨島の新開地が、まだ土手や竹藪だった明治の始め、ここにおせっかいで清潔好きの狸がいた。ある年の十二月の末の粉雪が舞う寒い夜。知恵島の甚兵衛さんが、ぶるぶる震えながら土手にさしかかると、後から足早やに追いついてきた人が、

「えらい今夜はサブイなあ！　この向うに風呂屋がでけてなあ、今夜はタダで、誰でも入らしてくれるんじゃと。……私しゃえっとぶり（久し振り）に、風呂に入らしてもらおうと思うて行っきょんじゃ。おまはんも一緒に行かんでか……。」

と言う。めったに体を洗わない独り暮らしの甚兵衛さんは、風呂など必要

ないから、家にはなかった。三年前の暮れに隣で風呂を借りて入って以来、まだ一度も体を洗っていないので、ちょうどまる三年が過ぎた。自分でも臭いような気がするのには、またどこぞではんの来てがないやも精たれ者と蔭口を変じゃ！　あれからいないから、少し早で入らしてくれるのえ。こりゃ幸いじゃついて行った。

江川狸はきれい好き

風呂屋は思っていたよりも大きく、浴場にはガラス灯がこうこうと輝き、よく沸いたいい湯で、冷え切っていた体が、汗ばむくらいにぬくもってきた。

で、二、三年のうち借りて入らにゃ、嫁ら分らん。世間から言う者が現れたら大まだ三年しか過ぎていい気がするが、ただであればちょうどえと、その人の後から

湯から上がると、きれいな若い女が出て来て、背中まで流してくれた。アカにおおわれている甚兵衛さんの体を女がこすると、松の木の皮をこすった時のように、鱗のような物が、バラバラとはげ落ちた。

「まあまあこの人！　えっと風呂に入らなんだんか、よーけなことアカが付いとオ！」

と女はあきれて言う。生まれて始めて、きれいな女に裸を見られて、何とそれがアカまみれときたから、きまりが悪い。甚兵衛さんは恥ずかしさで真っ赤になりながら、

「前には風呂によう（よく）はいりょったんじゃけんど、近頃せわしかったもんじゃけん、風呂が沸かせいでからに……。」

と、言い訳をいった。三年越しのアカはすっかり落ちたので、甚兵衛さんの体は大分やせて見える。それでもサッパリした気分になって、脱いであったアカ臭い着物を着はじめた。すると竹が体にさわるのでよく見ると、風呂

場もガス灯も女も消え去って、そこは竹藪の中であった。では今の風呂はどこかいなとすかして見ると、足もとへ江川の水がひたひたと寄せている。では今入っていたのは、江川のドン渕の中であったんかえ！　しかし不思議に体はポカポカと暖かく、体のアカもきれいに落ちていた。

この藪の狸は清潔好きだったから、アカまみれの甚兵衛さんの、臭い不潔な体が見ておれなかったので、うまくだましてドン渕で洗ってやったのだった。それにしても、あまりの不潔さに狸が体を洗ってくれるまで、自分の体を洗うのが面倒くさく、平気で過ごしていた甚兵衛さんは、何とも情ない男であったが、おかげで百年後に、鴨島の民話に登場する事が出来た。

8、三軒屋の足なで女とユウネンの湖

知恵島の三軒屋と、喜来乗島との間は現在もユウネンと呼ばれ、江川が大きな渕になっていて、満々たる水をたたえている。江戸から明治にかけて、

ユウネンの両岸は柳や榎の大木がうっそうと茂り、アシや雑草が繁茂していて、気味の悪いところであった。北岸の三軒屋側に、渕の岸に沿って細い在所道がついていて、一歩踏み外せば渕に落ちるほどの近さに、水がひたひたと寄せている。ここには、正体の知れぬ化物がいて、夜がくると赤い着物を着た女に化けて、岸辺に近い渕の中にひそみ、男の人が通りかかると、水の中からヌーッ！と現れて、水に濡れた冷たく細長い手を差し延べて、男の向う脛をなでるのである。なでられた者はびんの毛が逆立つほどの恐怖に襲われ、腰が抜けてへたり込む者や気を失う者。悲鳴をあげて命からがら逃げ帰る者などが続出した。それを眺めて女痴漢のような化物は、ニタリと笑って水の中へ消えて行くの

三軒屋の足なで女とユウネンの湖

であった。明治の初め頃まで、この道に足なで女が出ると言うので、夜はめったに人通りがなかった。

それはさておき、ユウネンの渕は湖としての条件を揃えているため、鴨島町の新しい観光地として、早く開発されるよう特筆し、読者諸代の御考察を仰ぎたい。知恵島の三軒屋と喜来の乗島を二分する江川には、東西に二つの橋があって、両地区を結んでいる。すなわち東の橋を喜四三橋と呼び、西の橋は奉仕橋という。奉仕橋は大正十五年十一月に、三軒屋の青年団員十六名が、これまで橋のなかった同地点に、木造の橋を架設する事を計画し、橋の材料や道具を持ち寄って毎日手弁当で働き、同年十二月に竣工した。村から一銭の援助もなく、青年たちの奉仕だけで立派に出来上がったこの橋に、奉仕橋の名が付けられた。東のキヨミ橋の喜四三とは、喜来・四ツ屋・三軒屋の三集落の、それぞれ一字をとって名付けたものと言われている。この二つの橋の間は、長さ約七五〇メートルの低地で川幅が広がり、ユウネンの渕と

なっている。

いい伝えによると昔、近くにユウネンという寺があって、それが地名となったと言うが、発音から分析すれば寺号の可能性はきわめて低く、僧侶の名から出た可能性の方が高い。江川は奉仕橋をくぐると、この広い窪地に流れ込んで大きな渕を作っている。渕は東西に長さ七百メートル。南北の最大幅約七十メートル。深さは四メートルから五メートルと言われ、満々とした水はこの低地にたまって動かない。付近の住民はドン渕とか、ユウネンなどと呼んでいるが、これはまぎれもなく湖なのである。

水たまりを湖や沼として呼称するには、次のような条件がある。湖とは、周囲を陸にかこまれ、淡水をたたえた所。大地をカバーするように、広がりたまっている水をいい、水深一メートル以上で常に水が急流していないものでなければならない。沼とは、淡水が広がりたまったもので、平常の水深が一メートル以下をいう。ユウネンの渕は、人工的にせき止められたものでは

なく、吉野川の旧河道時代に出来た低地に、江川の水がたまっているのである。この低地で動かぬ大量の水は、平常の流れであれば入れかわるのに一か月以上はかかるであろう。あふれた水は喜四三橋をくぐって、幅四メートルほどの江川に戻り、湖を形成して来た大役を果たしたかのように、ゆっくりと東流して行く。まさに文句なしの湖なのである。

町当局はすみやかに、自然の恵みのこの渕を湖として着目し、観光地として開発されるよう、声を大にして進言したい。観光資源に乏しい鴨島町の真ん中に、小規模ながら天然の湖があるという事は、何と素晴らしい事ではあるまいか。四国には地形的に、天然の湖はないといわれているから、ユウネンは四国で唯一の天然湖なのである。江川に流れ込む汚水を制限し、ヘドロを取り除いて昔のように、バラスの河床の上を清くすんだ水が流れ、ユウネンの湖に白鳥やヨットが浮かんで、鴨島町の新しい観光地となってこそ、日本の名水百選に指定された、江川の意義も大きいものと言えるのではあるま

いか。

9、喜来狸ははずかしがり屋

大正の初め頃には江川の南岸、喜来の乗島には、まだ東西に長い土手が続いていた。乗島の東の端、牛島の城ノ内境に近い土手の周辺には、狸がたくさん棲んでいて、日暮れ時には早くも出て来て、土手や付近を走り廻っていた。ここの狸はみなおとなしく、化けるのが下手くそで、女などに化けて出られるほどの腕の立つ狸は、一匹もいなかった。やっと初歩的な簡単な技術で嫁入りのちょうちん行列を真似る事が出来たが、それを演じるのが精一杯だっ

喜来狸ははずかしがり屋

た。しかもその灯を、人間に見られるのがとてもはずかしいので、人間たちが寝しずまった真夜中を見計らって、土手の上で数個の灯を集めては、前後左右に飛び交して喜んでいた。狸たちはそれがとても面白いらしく、時々グンクン。キャッ！　キャッ！　と声を押し殺して鳴くので、近くの人たちが目を覚まし、狸の灯を見物しようとして起き出すと、その物音を聞きつけて、大あわてで灯を消して静かになってしまう。だから喜来の人たちは、狸の灯を見る時には、そーっと起き出して、戸の隙間から気付かれないようにして、息をひそめて見物した。

10、喜来の蛇池

昔、喜来乗島の東部、牛島の城ノ内境に、大蛇が棲んでいるという蛇池があった。場所は、江川にかかる喜四三橋の東南約二百メートルの地点で、現在は団地や公園になっていて跡形もない。この池は江川の水が流れ込み、中

央部はかなり深く、周囲は柳や榎の大木が茂って森におおわれ、イバラやかずらが繁茂していたので、人はめったに近づかなかった。

喜来の蛇池

江戸時代から、大蛇が棲んでいるという噂があったので、なお近づく者がなく、大蛇にとっては安住の地であった。池とその周辺には、食べ物が豊富にあったとみえ、大蛇は森から外に出る事もなく、明治になってもまだ生きていて、体長は六メートルにもなっていた。性格はおとなしく、人畜に危害を与えなかったので、村人もそっとしておいたが、明治の末期にはいなくなっていた。

11、藪で狸がドンヒャララ

毎年、村の秋祭りがすむと、その翌晩には牛島の天神浦の狸が、江川南岸の竹藪一帯を舞台にして、昨日の祭りばやしを一族総出演で真似るのが、恒例となっていた。ドンドコ、ドンドコ、チンコンコン。ワイワイガヤガヤ、チョーサヤじゃ。といった具合いに、本物の祭りばやしより盛大に行っていた。この素晴らしい狸の演技を見てくれとばかりの賑いである。天神浦の狸らは思った。なぜ人間は狸のこの見事な、幻想的な芸術を評価しないのか？　ただ恐ろしがって騒ぐばかりで、狸の持つ高度な幻術の

藪で狸がドンヒャララ

価値をあまりにも知らなさ過ぎる。全く能のない奴らばかりじゃ！　と。

狸たちは、何よりもそれが口惜しく、文明を持つ人間は、お化けや幽霊となると、他の動物たちでは考えられない恐怖心を持ち、狸を悪者あつかいにしてしまう。そのセンスの無さがはがゆかった。それはともかく、昔は天神浦では祭りの翌晩がくると、狸たちは江川南岸土手付近に棲む眷族を集めて、竹藪一帯で太鼓を叩き、何十、何百というちょうちん灯をゆれ動かして、人間と同様の祭りを再現させた。そしてただ真似るだけでなく、五穀豊穫と狸仲間の家内安全、天長地久、眷族息災を祈願していたようである。祭りもクライマックスになると、ちょうちんの灯を一か所に集結させ、ドーン!!　という大きな発射音をあげて、南の空へ飛ばした。火の玉は向麻山を越えて、はるか南の山中まで砲弾のようにとばす、すごい荒業であった。

12、煙草の火で女が退散

牛島の字天神の北にある江川の、南岸土手一帯をまとめて天神浦という。ここはかつての旧吉野川土手で、荒地が続き、竹藪や雑木が幅広く土手を覆いかくして、東西に延々と横たわっている。

ここに棲む狸は男が好きで、夜になって男が通ると、待ってましたとばかりきれいな女に化けて、

「兄さん！　チョットの間、私と遊んで行かんで？」

と声をかける。大ていの男が狸が化けて出たなと知りながら、化かされているから、煙に巻かれたように頭がボーッとなり、女

煙草の火で女が退散

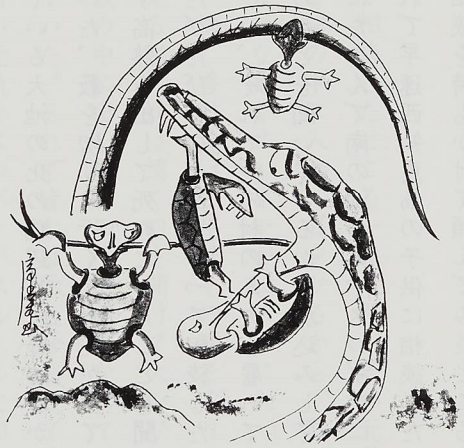
の発散するその色気と愛らしさに、ムラムラと変な気になって女について行く。そして女と一夜を楽しく過ごしたつもりでいるが、実際にはさにあらず。一晩中竹藪の中を這い廻って、突き傷、掻き傷で血みどろになり、着物はボロボロに破れて、朝になると呆然として藪から出て来る。だからこの近辺を通っているとき、きれいな女が出て来ると、変な気を起こさずに落ちついて腰を下し、タバコを一服吸うと、女は火が怖いらしく、スーッと消えていなくなるという話。

13、大蛇と亀の戦い

明治の始めよりまだ前の頃にあった話である。今の遊園地の上流の北の方の現在藪が残っている周辺は、昔は大藪でその中に周囲三百メートルもあろうかと思われる大池があった。いつも青黒く濁っていて深さもはかり知れなかった。大藪の中なので無気味で誰も近づかなかった。それもその筈で池の

主といわれた長さ五間、胴廻り三尺といわれる大蛇が住んでいて、付近の家では度々飼い鶏や、家畜が襲われたりしていたし、もしその姿を見た者は高熱を発して死ぬと云い伝えられていたからである。

また遊園地の西の旧堤防の下には周囲百メートルほどの池があって、それも竹藪に囲まれていたが、竹は細くて低く、また池も浅くて澄んでいて、たくさんの魚といっしょに亀やスッポンもたくさん住んで、冬の水の温い時は池の中を泳ぎ廻り、夏は水が冷たいので竹藪の中に入って遊んでいて、付近の子供たちも魚をすくいに行っては亀やスッポンと遊んで大



大蛇と亀の戦い

の仲よしになっていた。

その頃東知恵島では人がしだいに増えて来て、しだいに土地を開墾して拡げていたが、洪水の度に田畑が流されるので堤防を築くように話し合い庄屋を通じて殿様に申し上げ許可を取りつけた。

しかし唯困ったことに大蛇の住んでいる大池の北の端辺りに堤防がかかることであった。さあ弱ったことになった、藪を切りに行くと大蛇が出て来るかも知れない、その姿を見た者は必ず高熱を出して死ぬということを聞いているので人々は思案投首であった。たびたび皆なが寄り合って相談したが、わしが切りに行くといい出す者がいない、それで他の村の人夫を雇って切ろうと思ったが、他の村の人夫も大蛇のことを聞いているから尻込みして引受けてくれない。そのうち誰かが子供にたのんで南の池の亀やスッポンに相談してみてはどうかと云い出した。それで早速西知恵島の子供に相談したので子供たちは仲良しの亀やスッポンに相談を持ちかけて頼んでみたところ亀や

スッポンはそれでは私たちでどなにかして大蛇を退治してあげようと返事をしてくれた。

それで亀やスッポンたちは集まって相談したところ一番大きい若い元気なスッポンが私が一番に大蛇が寝ている口の中に入って屁をひるから、屁が臭くて大蛇が口をあけている隙に若い元気な亀やスッポンが口の中に入って大蛇の舌や喉を噛み破ればよいと相談一決、善は急げと早速その晩そろりそろりと亀やスッポンが大池に近づいて見ると大蛇は薄く口を開けて大いびきをかいて胴体は池の中に、首から上を藪の中に出して竹の横倒しになっているのを枕にして気持ちよさそうに眠っていた。それで皆なは示し合わせて音を立てないように近づき、先ず大きな若い元気なスッポンがスルスルと口の中にもぐり込んだ。それでも気がつかぬようなので二、三匹がもぐり込んでスッポンが大きな屁をひったので大蛇はようやく目を覚ましたが、もう遅い。屁が臭いので大口を開けたところへここぞと亀やスッポンが口に入り込み、

舌や喉を思い切り噛み切ったので、大蛇は苦しさにのたうち廻り、さすがの大蛇も一時間ぐらい後には長く延びて、口から沢山の血を吐いて死んでしまったというお話これでおしまい。

14、カッパの恩返し

明治の初め、まだ堤防もなかった頃。吉野川遊園地のある付近は大藪であった。この藪の中に可愛いそうな年寄りの女の人と十歳くらいになる女のお遍路さんが住みついていた。

昔は今のように養老院や生活扶助というものがなかった。この婆さんと娘の子の二人連れも若い夫婦が病気で死んでしまって、財産もなかったので、お四国遍路に行けばどうにか食べて行けると人から聞いて、はるばる播洲から四国へ渡って来て、四国八十八か所をめぐり人々のお接待や恵みを受けて夜は人家の軒下や寺の縁の下、神社の社殿などに寝て雨露しのいで、生命を

つないでいた。しかしお婆さんはもう七十歳を越した上に足をいためて歩けなくなったので、四国霊場第十番の切幡寺と第十一番の中間のここの江川の竹藪の中に住みついた。毎日の生活は孫娘が家々を廻り四国遍路で覚えた心経をとなえてお米やお麦、お金をもらって来ては腹をへらしながらもその日その日を暮らしていた。

カッパの恩返し

娘の子だけなら住み込んで子守でも傭ってくれるという慈悲深い人の話しもあったが、お婆さんまで一緒に面倒をみてくれるという奇特な人はなかったのでこんな生活を続けていた。しかし近所に親切な人があって、大きな釣針と畳糸をくれて、その人は、はや針のし

方を教えてくれた。そこで娘の子はミミズを取って来て毎晩川にしかけると毎朝必らずナマズやギギ、鯉などがかかった。時にはウナギなどもかかって食物の助けになった。

ある朝のこと、近くの渕から河童が出て来てその女の子に話しかけた。「私は年老いて魚がとれんのです。私の子供もいたんじゃが、よそへ嫁入りしたり、男の子は上流の岩津の渕が棲みよいといって行ったきり何の便りもない。家内も三年前に死んでしまって私一人でなあー、年をとって魚を取ろうと思っても魚の逃げるのが早うてもうよう取らんし、もう二日も何も食べていないので腹がへってへって……どうかその魚を一匹恵んでくれまへんで。」と娘の子に頼んだので娘の子は、心よく二匹つれていたギギを一匹恵んであげたそうじゃ。そして「河童さん日々あげるから朝来なはれよ。」といったので年老いた河童は毎朝姿を現わして魚をもらって生きていた。

そして、河童と仲よしになって薪を集めて来たり、いろいろな手伝いをし

たり、婆さんの肩や足をもんだりして仲良く暮らしていた。

九月になって風向がおかしくなると、河童は天候のことは良く知っているから「娘さんこんどの風は暴風になるでよ、大水がでるけん南の村長さんの納屋にでも入れてもらいなはれ……。」といってくれたので早速村長さんに頼んで納屋に入れてもらったので、小さな荷物であるが漏らさずに済んだのである。そして台風がすんで再びもとの藪の中に家を作り直して住みついた。ところがそれから一ヵ月ほどして、河童が来んようになったので、娘の子は心配して河童の渕のところへ行ってみると、河童が大息をついている「どうしたんで。」というと、河童は「わたしはもう今日、明日の命でわ、ほんとうにお世話になったなあ。」と云うのでいろいろとなぐさめて、今朝釣ったウナギを焼いて持っていったりして、介抱したりしたが、寿命か河童は臨終を迎えたようであった。

「娘さんありがとう、ありがとう。お礼になるかならんか分からんが、十年

くらい前の大水のときに、ここへ金色に光るものが入っている箱が流れついたので拾ってそのこ石の下に埋めておいたので、掘ってみなはれ、あんたにあげるから。」といって、しばらくして息絶えた。

娘さんは河童の骸を穴を深く掘っててていねいに埋めて、遍路で習い覚えたお経を唱えて手厚く葬った。そして石の下を掘ってみると、大判・小判が五十三枚も入っていた。それで早速警察へ届けたところ半年しても持主が現れなかったので、警察から通知があって下げ渡された。娘の子はどうしたらえんじゃろうと迷っていると、その大判・小判を売ってくれという人が現れたので、警察の人や村長さんの世話でそれを売ったところ、土地が五反も買え、小さい家も建ったので、お婆さんと、娘さんはそれからしあわせに暮しができるようになったという河童の恩返しのお話。

15、ホテイアオイが一夜のうちに消えた話

いつの頃であったか吉野川の堤防が出来て江川への流路を完全に堰き止めた当時の話である。今でも吉野川が洪水の時、江川は少ししか増水しないで、吉野川の水が引き始めると初めて増水する。これは江川の下流が滞水するから起こる現象と思われるが、余り人の知らないことである。

この現象に関連して面白い話がある。江川の上手に堤防が作られ水が堰き止められ流れないようになったので、ホテイアオイが繁殖するようになった。鴨島小学校のところから北の千田須賀の方へ行く道路が出

ホテイアオイが一夜のうちに消えた話

来たが、ある年のこと、吉野川が洪水の時、江川も少し増水したので丁度その道路上を水が越すようになった。それで繁殖していたホテイアオイが上流から押し流されて、その道路の上に一杯溜った。そしてなお上流から押して来て山のように積み重なって人々の通行も止ってしまった。

住民の通報によって役場の職員を連れて町長が現場へやって来たのが丁度午後の三時頃であった。町長は「コリャ困ったなあ、出来るだけ早うとり除けんといかんなあ」、「町長はんどなにしましょうか」、「そうじゃなあ明日の朝にでも消防の人に頼んでみたらどうじゃろか」、「そうですねえ、ほな明日一番に取り除けてもらうように消防組長に頼んどきます」などと相談しているところへ、江川の上流の竹藪の中に住む竹やんというひとり暮しの老人が通りかかった。この竹やんは江川の増水は吉野川の水が引き始めてからということを知っているので、「ハハア町長はんはこのホテイアオイを取り除けるのに弱っとるんじゃなあ、こりゃ酒代になるわい。」と考え、そこへ近づい

て「町長はんこの水草を取り除ける相談しなはんりょんで。」といった。町長は「うんそうじゃ、明日の朝消防団の人々に頼んで取り除けてもらおうと思うとるんじゃ。」「ほうでこりゃようけじゃけんな、こんなに山のように溜ったら大変じゃなあ、取っても取っても上から上から押し寄せて来るし。」「そうじゃなあ。」「町長はんは消防に頼もうとおっしゃるけんど、そしたら御礼もようけいれしまへんか。」「百人も出てもらうとして百日分の出動料は覚悟せにゃあかんがな。」「町長はんどうせ頼むんなら明日の朝までに私が取り除けたげるでわ。」「ごぢゃあいわれん一人で取り除けられるかいな。」「ほなとにかく嘘かほんとか、かけてみんで、もしこの水草が明日の朝までに無うなっとったら酒十本はりこんでくれるで。」「よっしゃはりこむでわ。」町長は冗談の心算で約束した。当時は堤内に家が無く、洪水の時の吉野川と江川増水の関係を知っている人は少なかったが、竹やんはちゃんと知っていたのである。

その頃はちょうど吉野川の水かさは頂点で夕方から少しづつ引きはじめて

いたので例によって夕方頃から江川の水が少しづつ増水して来つつあった。
町長は竹やんとの話は信せず、明日出勤したら一番に消防に頼もうと思ってぐっすりと寝た。そして何時もの通り出勤して来ると、竹やんが役場の入口に立っていた。「町長はんお早うございます。」「ああ竹やんで早いなあ。」「町長はん昨日の話しぢゃけんど、もう江川の水草は一本も残らず取りのけてあるけんな。」「ええ嘘いわれん、おまはん朝から酔うとるんとちがうで。」「ほな町長はん、係の町田はんに聞いてみてつかはれ。」といっている時にちょうど係の町田はんが出て来て、「町長はんおはようございます。今朝私が出勤したら竹やんが来とって、昨日のところを見てつかはれというので役場の自転車で見に行ったら、もう一草も残っていません。」と報告した。
町長はんも竹やん一人で取り除けられる筈がないのにどうしてだろうかと不思議がったが、とにかく消防に頼めばお礼金が沢山いるところ酒十本ですむんならと近くの酒屋に電話して竹やんとの約束を果した。

町長が水の増減関係を知ったのはその日の夕方であった。竹やんに一杯食わされたが後の祭りであった。

16、冬に蛇が動いていた話

蛇は冷血動物で冬は冬眠するのは子供でも知っているが、大寒のさ中の旧正月前に動いていたのを見た人がいる。
時は昭和二十三年のことである。第二次世界大戦は終わったが、在満部隊に入隊していたためにシベリヤへ抑留(よくりゅう)され、ようやく帰国出来たばかりの近所の若者の目撃(もくげき)した話である。
もう旧正月も四、五日という年の瀬の日のことである。雪が少し積ってはいたが風がない好天の早朝のこと、「今日は雪が少し積っているので畑仕事にもならんわい、裏の竹藪で竹を二、三本伐(き)って来て竹垣の修理でもしようかなあ」、と鎌を下げて堤防を越えて藪の中へ入って行った。ひょいと何気な

しに広い藪を遠くまですかして見ると一ヵ所だけ真白に湯気のようなものが立ち登って、その湯気が霧になっていて竹の葉を通してくる太陽の光で白くはっきりと見えていた。そこだけどしたんじゃろかと近づいて見ると、その霧が頬に何か生温たかく気持ちよく感じて来る。そしてそこだけ雪が無かった。どしたんじゃろかと考えたがわからない。それでそこら辺の竹の葉を取り除けて見ると、そこは砂利や砂でなくごろた石が多く混ったバラス地であった。若者も子供の頃から川や川原で遊んで育っているし、また江川で夏の盛りには水が冷たくて二分とは泳げないし、冬の盛りには雑魚がはね廻り、釣にはもってこいの季節であることを知っていたので「ハ

冬に蛇が動いていた話

ハア、これは江川の方へ流れている地下水の脈で温かい水が蒸発して冷たい外気にふれて霧になるんじゃわい、江川の早朝に出来る現象と同じじゃわい」と思ってなお付近を歩き廻っていると積っている竹の葉が動いたので、何んじゃろかと思って見つめていると、二匹の親指くらいの太さの蛇が葉の下を向うへ這って行った。

今は竹藪も枯れてしまい耕作地となっているが、そこは下がごろた石地で作物が取れないので放置されて細い竹が生えているが、冬の無風の早朝には、今でも薄い霧が巻く現象が見えるそうである。

17、蛇がふところに沢山は入り込んだ話

まだ吉野川の新堤防が出来ていない明治の初めの頃の古いお婆さんから聞いた話である。お婆さんの生まれた家は粟島にあった。当時はまだ堤防が無かったので、吉野川がいざ大水となると南の山裾から北地の県道辺りまで水

が乗って海のようで、家が流されてその屋根に人々がへばりついて助けを求めながら流れていくのを洪水毎に眺められたそうである。お婆さんの家は粟島でも比較的に高い土地の上に一間（二メートル）もの石垣を積み上げて建てあったので、まだ床がつかった事がないからお婆さんは子供の時に時化が来て家の辺りまで水がつかりかけても少しも恐くなかったそうである。

ある年の洪水の時の話である。お婆さんの家の南の方に甚吉さんという人がいて何時もお婆さんの家の畑仕事を手伝いに来ていたそうであり、生活もあまり裕福で無かったので、家の地盤も低かった。いつもは家族全員がお婆さんの家へ家財道具を運んで避難して来るのであったが、その時はこ

蛇がふところに沢山は入り込んだ話

っちの方は余り雨が降らなんだので、大したことはないだろうと家族だけお婆さんの家へ避難して甚吉さんだけが家に頑張っていた。

ところが実は高知の方で大雨があったので予想外に大水になり、あれよあれよという間に水嵩が増して来て家も流されてしまった。お婆さんの家の窓から心配して見ている家族の前で藁屋根にはい上がって下へ下へと流れて行った。藁屋根は絶対に轉覆しないそうで家族の者もどこかへ流れついてくれるだろうと涙を流しながら神さんや仏さんに祈って眺めていた。

ところが甚吉さんは遊園地の北の方のドンガン池辺りまで流れて来た時、ちょうど一抱えもある榎の木があったので「しめた」と水練達者な腕の見せどころとその木に泳ぎつき、木の股のところに登って帯をといて早速自分の体を枝に括りつけて落ちないようにした。「ヤレヤレ、助かったわい、今日一日辛棒しとったら水も引くじゃろ」とひと息入れていた。

ところが暫くして気がついたのであるが、上の木の枝に蛇が巻きついたり、

長く体を伸ばしたりしている。青大将ばかりなので噛みつかれる心配もないしするし、畑で蛇には慣れているので気にもかけず、その晩は木から落ちないように気をつけて眠らないようにつとめたが時には眠ったようであった。

さて嵐もおさまり東の空が白みかけて来ると水も少しは引き始めたようであったが、日が上に登り温度が昇りかけたと思うと、蛇が体を動かし始めた。

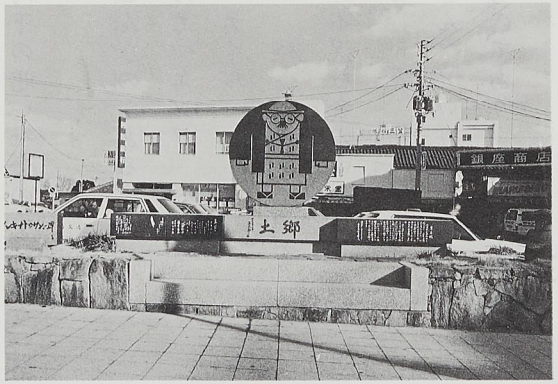
そして甚吉さんの体温を嗅ぎつけたのか近くの五、六匹が甚吉さんの着物の中の胸や腹や背中のところにズルズルと這い込んで来て、体温のぬくもりの感触を気持ちよさそうに味わっていた。

その日の内に水も引き甚吉さんは無事助けられたのであるが、家に帰って家族の者に元気な顔を見せた時に集まっていた人や家族に蛇のことを話したところ、聞いていた内の一人の年寄りは、「わしもそんなことが一回あったでよ。」と物珍らしくないようであったが、お婆さんは子供心にも恐い話じゃと思って聞いたとのことである。

第七章　名水の郷

1、喜劇王ノンキナトウサン（曽我廼家五九郎）

国鉄鴨島駅前の広場に円型の人物像の石碑がある。これは本町の出身で、大正中期から末期にかけて日本の喜劇界を風靡した故曽我廼家五九郎こと本名武智故平の顕彰碑である。氏は日本のチャップリンともいわれ、東京浅草で喜劇一座の座長として、演劇を通じて社会を風刺し、観客の涙と笑いを誘った喜劇王である。また当時「まんが」の走りである麻生豊の「ノンキナトウサン」が映画化されるや主演俳優として、好演し日本中の人気



曽我廼家五九郎の碑

を独占するとともに、日支事変が起こり戦時下の暗い社会の中に明るい笑いをふりまいたのである。

その「ノンキナトウサン」の唄の一節にこんなのがある。

ノンキナトウサンテッポカツイデ　ハルカコエダヲ　ミテミレバ
ツガイノハトポッポガ　ナランデトマッテイル
マンナカネラエバドッチカアタルダロ　ハハ　ノンキダネ

この唄が当時大流行して、その頃の日本の不況社会の中の人々の暗い心をどれだけやわらげ明るくしたことであろうか。

現在鴨島町のモットーとして「ごくろうさん」というお互のねぎらいの挨拶があるが、これは五九郎の名をもじったものであり、町民同志のお互のいたわりの言葉として使われている。

これに関連して「五九郎音頭」という唄も作られている。

五九郎音頭

一、紺のかすりに　ハイカラ帽子　サテ
粋な　ちょびひげ　よく似合う
人気　集めた　涙と笑い　ソレソレソレソレ
ノンキナトウさん　晴れ姿　ソレ
五九郎音頭だ　手拍子打って
阿波の鴨島　総おどり
シャンと　シャシャンと　総おどり

二、花の浅草　舞台もせまく　サテ
自由　唱えた　壮士ぶり
喜劇　ひとすじ　男を睹けた　ソレソレソレソレ
ここは　曽我廼家　偲ぶ町　ソレ

三、明日へ流れる　江川の水に　サテ

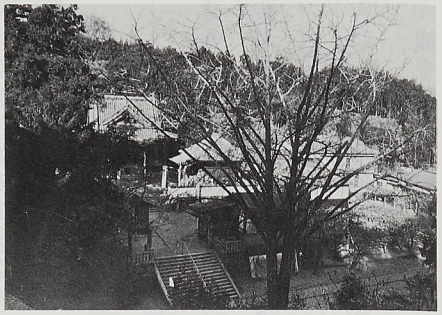
映す　あかるい　町づくり
徳を讃える　五九郎市に　ソレソレソレ
寄せる人波　人の渦　ソレ

四、愛のひとこと　「ごくろうさん」はサテ
通う　こころの　合言葉
暮し　ゆたかな　きずなの町に　ソレソレソレ
今日も　人情の　菊が咲く　ソレ

2、四国霊場の寺

弘法大師ゆかりの四国八十八か所は四国全域にわたって配置されているが、阿波の国は第一番霊山寺から第二十三番薬王寺まで二十三か寺あり、発心の道場として修業のための遍路が最初に訪れる寺々である。

昔は難行苦行することに依て即身成仏出来るという思想から真夏でも汗を


四国霊場第11番札所藤井寺全景

流し、厳寒の冬でも冷たい北風にさらされながら順拝し、修業したのであるが、現在は観光半分で自動車を連ねてのお四国廻りをしている。

江川の清らかな湧水の浸水すると考えられている川島潜水橋辺りから東北方五〇〇メートルほどのところに粟島渡しとも無銭渡しともいわれる渡しがあって、一般の人たちは渡し賃を取られたが、お遍路さんは無料であった。

毎年春ともなり菜の花やレンゲ・タンポポが咲きそろう頃は遍路の最盛期で、総白衣の身ごしらえをしたお遍路さんや、近在のお参りの人たちが列をなして第十一番札所の藤井寺へと、あるいは逆打ちをして第十番札所の切幡寺へお参りしたものである。特に娘さんはせめて阿波一国をお参りして身を清めないとお嫁に行けないといった風習なども

あって、かすりの着物に青い蹴出をちらつかせながらのなまめかしい姿はなんともいえない風情であった。

お接待といってそのお遍路さんにお米・赤飯・おすし・餅・みかん・お菓子などの食物や、タオル・ハンカチ・チリ紙などの品物をあげて、そのお遍路さんからお大師さんのご利益を分けてもらうといった風習もあり、また善根宿といってお遍路さんをただで泊めてあげる信仰あつい習慣もあった。

第十一番の札所藤井寺は飯尾の山手にあり、本尊薬師如来は久安四年（一一四八）備中（岡山県）の仏師経尋によって彫刻されたもので像高八十七センチあり、四国霊場第六十六番雲辺寺の千手観音とともに四国八十八か所の内でも古い仏像で国指定の重要文化財である。

3、阿波西国観音霊場の寺

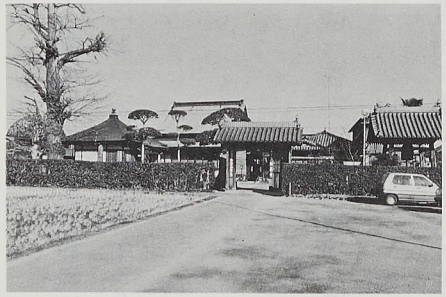
観音霊場は観音さんが三十三の姿に変化して人々の願いをかなえてくれる

仏さんであるということで、三十三か寺を合わせて観音霊場としてお祀りしてあり、関西を中心に西国三十三か所に霊場が設けられたのである。

阿波でもそれにならい徳島市から鳴門市、板野郡、阿波郡、麻植郡、名西郡にかけて霊場が設けられているが、飯尾にある報恩寺が阿波西国第二十九番の札所で昔から飯尾のお観音さんと人々に親しまれ、多くの人々から厚く信仰されている。

またこの寺は藩政時代からこの付近が藍作地帯であったので、本堂にお祀りしてある愛染明王の、あいせんが藍染と発音が同じなので、藍作や藍染の守護仏として関係の人々から信仰された。

またこの寺には室町時代を代表する歌人として有名な飯尾地区の出身といわれる飯尾彦六左



阿波西国観音霊場第29番札所報恩寺

衛門常房の墓と伝えられる五輪塔がある。

この常房は八代将軍足利義政に仕えた書吏であるが書道にすぐれ、和歌にも通じて数々の優れた歌を残しているが、応仁の乱によって焼野原となった京の都を歌った有名な歌を作っている。

なれや知る都は野辺の夕ひばり
　　あがるを見ても落つるなみだは

なおこの寺には元亨元年（一三二一）の麻植郡では一番古い石で作った塔婆といわれる板碑もある。

また山路にある玉林寺も阿波西国観音霊場三十番札所である。

4、麻植保司平康頼公ゆかりの寺や神社

文治元年（一一八五）三月壇ノ浦の海戦を最後に、権勢を誇った平氏も滅亡し源氏の天下になった。康頼は平家の一門でありながら頼朝に味方してい

たので文治二年（一一八六）その行為に酬いるため朝廷の内蔵寮である麻植保司に任じた。麻植保司とは現在の鴨島町（江川から北の知恵島地区と樋山路地区を除く）であろうといわれている。

平康頼は後白河法皇側近の法勝寺執行僧俊寛・藤原師光・藤原成親などとともに平氏打倒を京都東山の鹿ヶ谷でたびたび重ねたが、事が露見して平清盛のために捕えられ、僧俊寛とともに鬼界ヶ島に流されたが後許されて帰京していたのである。以前に尾張の国司であった時、頼朝の父義朝の墓が荒れているのを見て修理したり、小堂を建て水田三十町歩を香料として寄付したこともあったりしたので麻植保司として派遣されたのであろう。

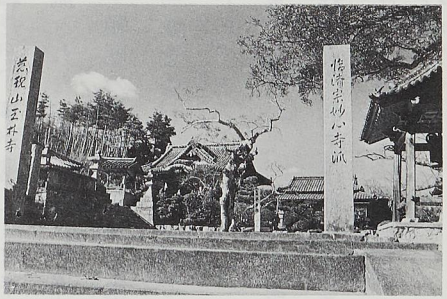
康頼は保司庁を森藤付近に置いたが、後白河法皇や自分の母、鬼界ヶ島で許されることなく悲業の最後をとげた僧俊寛、それに鹿ヶ谷で平氏打倒を図った一味の人々の霊をなぐさめるため、鬼界山補陀落寺と悲眼山玉林寺の二寺を建立して朝夕その人たちの冥福を祈ったといわれている。

その後両寺を合併して現在まで残っているのが玉林寺である。

玉林寺には康頼が使用していたといわれる臼や、県指定文化財である釈迦十六善神像、同じく県指定の樹齢三百七十年くらいといわれるモクコクがある。

康頼の遺跡としてはこの外に康頼が鬼界ヶ島で赦免を朝夕祈った紀州の熊野神社のおかげで赦されたので、その神社を歓請したといわれる熊野神社が玉林寺の東にあり、康頼を祀った康頼神社や県指定の天然記念物である壇の大樟なども玉林寺の西北方の壇の登り口にある。

なお、この寺は阿波西国霊場の第三十番札所でもある。



阿波西国観音霊場第30番札所玉林寺

第八章　四国の名水百選の案内

1、剣山御神水（徳島県三好郡東祖谷山村）

剣山の山頂付近の高さ五〇メートルの御塔石の下から湧出している。剣山国定公園区域内にあり、祖谷川の源流である、御塔石が剣神社のご神体であるので御神水といわれる。

剣山は信仰の山として尊ばれていて、周辺は国定公園に指定されている。御神水は剣神社のすぐ側にある高さ五十メートルの御塔石の下から流れ出る清水で、ここの地質は石灰岩質でミネラル分が豊富であり長期間腐らないということで御神水として持ち帰る人も多い。

字は御神水と書くがおしきみずと呼ばれているのは、しきとはしきりに湧き出

るのしきであり、四季を通じて止むことなく湧出するのしきに通ずる言葉でもあるから字は神水の意である神の字を使ったのではないであろうか。

2、湯船の水（香川県小豆郡池田町）

この水は小豆島の湯船山の中腹にあり、水資源の少ないこの島では貴重な水源である。湧水量は毎日約四百立方メートルもあり、水道水として利用される貴重な水で、その余りは共同洗い場として、また農業用水としても利用されている。

勿論ここの水は干ばつの時にも

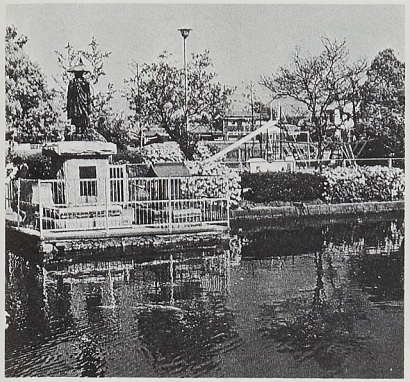
かれることの無い水の少ない島としては命よりも大切な水である。水源である湯船山は天然記念物の対象として保存されている自然性の高い樹林帯であり、この樹林帯によってつちかわれた霊水である。また、この仏堂は南北朝時代（一三三六～九二年）に南朝方として戦った佐々木信胤が干ばつによる飢饉を救った霊水として仏堂を建立し、この湯船の水を奉り、現世及び後世の冥福を祈ったといわれている。

3、うちぬき（愛媛県西条市）

市内至るところに見られる自噴井で、「市民憲章」で〝水の都西条〟とうたわれているぐらい水の多い都である。

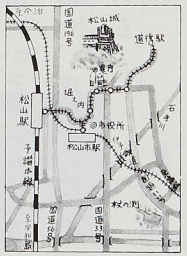
石槌山天狗岳（一九八二

メートル）を主峰とする石槌山系に源を発する加茂川により涵養され、一日の自噴量は約九万立方メートルに及び四季を通じて水温変化のない水は市民のあらゆる需要に応じていて総てが打抜き井戸でその数は二千本といわれている。



4、杖の淵（愛媛県松山市南高井町）

四国には湧水井に対して数多くの大師伝説があるがここも弘法大師が杖を突き立てたら水が湧き出したという他の大師井戸と同じような伝説の水源である。



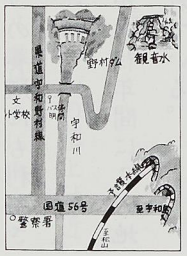
この水は主として農業用水として利用され、

またこの水源の淵は児童公園として地域の人々の憩いの場として親しまれている。

この淵は四国霊場第四十八番札所西林寺の南西約二百メートルのところにある湧水で、ここに自生するテイレギと、ここに生息するスナヤツメを市指定天然記念物として地域の人たちが保存につとめている。

5、観音水（愛媛県東宇和郡宇和町）

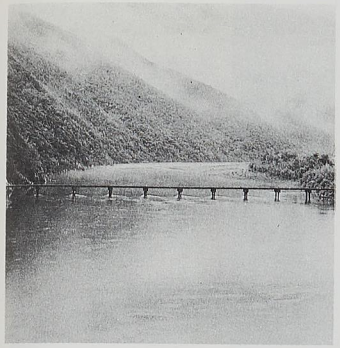
この湧水は歯長山地の山腹にある鐘乳洞からの湧水であり、大洲の屋形船で有名な肱川の源流である。その水量は日量およそ一万立方メート



ルもあり、肱川の支流宇和川にそそいでいる。ここの水も水量・水質の変化が少なく一部は水道水として利用されているほか、アマゴの養殖にも利用されている。

湧水の側にある観音堂はこの地の城主足利歯長又太郎が永禄年間にこの地を訪れ、自分が信仰している観音像を安置したと伝えられている。

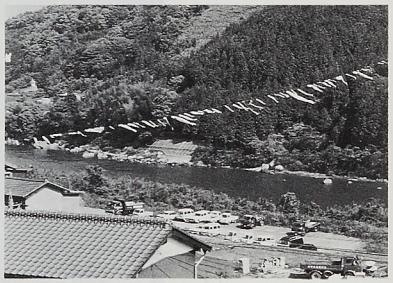
また、この水は宇和町が名勝に指定するなどしてその保全に努めている。



6、四万十川（高知県西部）

この川は日本の河川の中でも最も清澄な大河川の一つとして有名である。またアユ火振り漁などの古来からの伝統の漁法が続いているのも珍らしい。

この川は高知県の中央から土佐湾の西端足摺岬の近くまで流れる全長二百キロメートルに及ぶ四国一の吉野川に次ぐ大河で流域面積の八十五％が森林地帯で河川自体も人工を加えておらず豊かな自然がそのまま残っている川である。中流域では蛇行の激しいところが多く、奇厳絶壁や瀬、渕が連続して、水の清らかさと相まって名勝地として有名で、しだいに観光客の数がふえている。



7、安徳水（高知県高岡郡越知町）

この湧水は高知市西方三〇キロメートル、県立自然公園横倉山の頂上付近に湧出している。要図のように杉原神社の西北約百メートルの地点にある。

この泉は一日の湧出量百立方メートルと湧出量は少ないが清澄である。

文治元年（一一八五年）屋島の合戦に破れた平氏一門は安徳天皇を奉じて讃岐山脈を越え、阿波の祖谷方面からさらにこちらの方へ八十五名の人数で逃げて来て、新行宮（あんぐう）を営んだという伝説の地であり、この水を飲料水として利用されたと伝えられている。

またこの地は山嶽霊場（さんがくれいじょう）として修験道場（しゅげんどうじょう）としても栄え、行場の水として利用されたという。

第九章　全国名水百選の案内一覧

県名	No.	名称	所在地	水の形態
北海道	①	羊蹄のふきだし湧水	虻田郡京極町	湧水
	②	甘露泉水	利尻郡東利尻町	湧水
	③	ナイベツ川湧水	千歳市欄越	湧水
青森	④	富田の清水	弘前市大字紙漉町	湧水
	⑤	渾神の清水	南津軽郡平賀町大字唐竹	湧水
岩手	⑥	龍泉洞地底湖の水	下閉伊郡岩泉町	湧水
	⑦	金沢清水	岩手郡松尾村寄木	湧水
宮城	⑧	桂葉清水	栗原郡高清水町	湧水
	⑨	広瀬川	仙台市	河川
秋田	⑩	六郷湧水群	仙北郡六郷町	湧水
	⑪	力水	湯沢市字古館山	湧水
山形	⑫	月山山麓湧水群	西村山郡西川町	湧水
	⑬	小見川	東根市羽入	湧水
茨城	⑯	八溝川湧水群	久慈郡大子町	湧水
福島	⑮	小野川湧水	耶麻郡北塩原村	湧水
	⑭	磐梯西山麓湧水群	耶麻郡磐梯町	湧水
栃木	⑰	出流原弁天池湧水	佐野市出流原町	湧水
群馬	⑱	尚仁沢湧水	塩谷郡塩谷町上寺島	湧水
	⑲	雄川堰	甘楽郡甘楽町	用水
	⑳	箱島湧水	吾妻郡東村大字箱島	湧水
埼玉	㉑	風布川・日本水	大里郡寄居町	湧水
千葉	㉒	熊野の清水	長生郡長南町佐坪（字滝ノ上）	湧水
東京	㉓	お鷹の道・真姿の池湧水群	国分寺市西元町	湧水
	㉔	御岳渓流	青梅市	河川
神奈川	㉕	秦野盆地湧水群	秦野市	湧水
	㉖	洒水の滝・滝沢川	足柄上郡山北町	滝布川・河川

県名	No.	名称	所在地	水の形態
新潟	㉗	竜ケ窪の水	中魚沼郡津南町	湧水
新潟	㉘	杜々森湧水	栃尾市西中野俣	湧水
富山	㉙	黒部川扇状地湧水群	黒部市、下新川郡入善町	湧水
富山	㉚	穴の谷の霊水	中新川郡上市町	湧水
富山	㉛	立山玉殿湧水	中新川郡立山町	湧水
富山	㉜	瓜裂の清水	東礪波郡庄川町	湧水
富山	㉝	弘法池の水	石川郡鳥越村字釜清水	湧水
石川	㉞	古和秀水	鳳至郡門前町	湧水
石川	㉟	御手洗池	鹿島郡田鶴浜町	湧水
福井	㊱	瓜割ノ滝	遠敷郡上中町	湧水
福井	㊲	お清水	大野市泉町	湧水
福井	㊳	鵜の瀬	小浜市神宮寺	河川
山梨	㊴	忍野八海	南都留郡忍野村	湧水
山梨	㊵	八ヶ岳南麓高原湧水群	北巨摩郡長坂町、小淵沢町	湧水
山梨	㊶	白州・尾白川	北巨摩郡白州町	河川
長野	㊷	猿庫の泉	飯田市羽場	湧水
長野	㊸	安曇野わさび田湧水群	南安曇郡豊科町、穂高町	湧水
長野	㊹	姫川源流湧水	北安曇郡白馬村	湧水
岐阜	㊺	宗祇水（白雲水）	郡上郡八幡町	湧水
岐阜	㊻	長良川（中流域）	美濃市、関市、岐阜市	河川
岐阜	㊼	養老の滝・菊水泉	養老郡養老町養老公園内	湧水
静岡	㊽	柿田川湧水群	駿東郡清水町	湧水
愛知	㊾	木曽川（中流域）	犬山市～可児川合流点	河川
三重	㊿	智積養水	四日市市智積町	湧水
三重	51	恵利原の水穴（天の岩戸）	志摩郡磯部町恵利原	湧水
滋賀	52	十王村の水	彦根市西今町	湧水

県名	No.	名称	所在地	水の形態
滋賀	53	泉神社湧水	坂田郡伊吹町大字大清水	湧水
京都	54	伏見の御香水	京都市伏見区	地下水
京都	55	磯清水	宮津市字文珠	地下水
大阪	56	離宮の水	三島郡島本町	地下水
兵庫	57	宮水	西宮市	地下水
兵庫	58	布引渓流	神戸市中央区	河川
兵庫	59	千種川	県西南部	河川
奈良	60	洞川湧水群	吉野郡天川村洞川	湧水
和歌山	61	野中の清水	西牟婁郡中辺路町野中	湧水
和歌山	62	紀三井寺の三井水	和歌山市紀三井寺	湧水
鳥取	63	天の真名井	西伯郡淀江町	湧水
島根	64	天川の水	隠岐郡海士町	湧水
島根	65	壇鏡の滝湧水	隠岐郡都万村	湧水
岡山	66	塩釜の冷泉	真庭郡八束村下福田	湧水
岡山	67	雄町の冷泉	岡山市雄町	湧水
岡山	68	岩井	苫田郡上斎原村	湧水
広島	69	太田川（中流域）	広島市（祇園水門～行森川合流点）	河川
広島	70	出合清水	広島県安芸郡府中町	湧水
山口	71	別府弁天池湧水	美祢郡秋芳町	湧水
山口	72	桜井戸	岩国市通津	湧水
山口	73	寂地川	玖珂郡錦町	河川
徳島	74	**江川の湧水**	麻植郡鴨島町	湧水
徳島	75	剣山御神水	三好郡東祖谷山村	湧水
香川	76	湯船の水	小豆郡池田町	湧水
愛媛	77	うちぬき	西条市	湧水
愛媛	78	杖の渕	松山市南高井町	湧水

県名	No.	名称	所在地	水の形態
愛媛	⑦⑨	観音水	東宇和郡宇和町	湧水
高知	⑧⑩	四方十川	県西部	河川
高知	⑧①	安徳水	高岡郡越知町	湧水
福岡	⑧②	清水湧水	浮羽郡浮羽町	湧水
福岡	⑧③	不老水	福岡市東区	地下水
佐賀	⑧④	竜門の清水	西松浦郡西有田町	湧水
佐賀	⑧⑤	清水川	小城郡小城町清水	河川
長崎	⑧⑥	島原湧水群	島原市	湧水
長崎	⑧⑦	渓流	北高来郡高来町	河川
熊本	⑧⑧	水源	宇土市宮ノ庄町	湧水
熊本	⑧⑨	白川水源	阿蘇郡白水村	湧水
熊本	⑨⓪	菊池水源	菊池市	河川
熊本	⑨①	池山水源	阿蘇郡産山村	湧水
大分	⑨②	男池湧水群	大分郡庄内町	湧水
大分	⑨③	竹田湧水群	竹田市	湧水
大分	⑨④	白山川	大野郡三重町	河川
宮崎	⑨⑤	出の山湧水	小林市	湧水
宮崎	⑨⑥	綾川湧水群	東諸県郡綾町	湧水・河川
鹿児島	⑨⑦	屋久島宮之浦岳流水	熊毛郡屋久町、上屋久町	河川
鹿児島	⑨⑧	霧島山麓丸池湧水	姶良郡栗野町	湧水
鹿児島	⑨⑨	清水の湧水	川辺郡川辺町	湧水
沖縄	⑩⓪	垣花樋川	島尻郡玉城村垣花川原	湧水

（名水百選ぎょうせい発行による）

本誌が刊行されるまで

本誌が刊行されるようになったのは、昭和六十年三月江川の湧水が名水百選に選ばれてから町の文化財保護審議委員の方々や町の有識者の方々に委員をお願いし、執筆を依頼して再三会合をかさねました。その結果編集方針、執筆分担を決定し、昭和六十一年三月脱稿へと努力してきました。

各委員さんより提出された原稿は専任委員さんにより加除修正も加えさらに専門委員さんにより監修を行い、掲載の写真も専門委員さんにお願いして、漸く完成することができました。しかし、資料の不足と私たちの微力により、将来の研究にゆだねる部分も多くあります。それぞれ委員さんの涙ぐましい結晶である本誌を愛読下さいまして、日本で百の中に選ばれた「江川の湧水」を大切に保護し、郷土の誇りとして子孫に伝えて行くことが出来ますようお願いします。

鴨島町教育委員会

編集委員

委員長	多田高信	委員	河野徳三郎
委員	青木幾男	〃	佐野辰夫
〃	石原芳一	〃	西條正昭
〃	植村芳雄	〃	芝原冨士夫
〃	大久保秀信	〃	田中善隆
〃	北川美津雄	〃	多田定夫
〃	城戸浩二	〃	徳野三男
〃	工藤禎造	〃	坂東章
〃	工藤善昭	〃	日野総一
〃	工藤俊夫	〃	三谷智章

（アイウエオ順）

〃参考文献〃

執筆上の参考に使用させていただいた文献・資料はつぎのとおりである。明記して謝意を表したい。

江川奇現象（吉田厳著）●鴨島町誌（鴨島町教育委員会編）●徳島県文化財読本（徳島県教育委員会編）●江川の水温異常について（立正大学地理クラブ）●江川周辺の井戸水温調査資料（立正大学教授新井正）（立正大学教授佐倉保夫）●異常渇水年における江川の水温特性について（高村弘毅）●名水百選（発行ぎょうせい）

表紙　石原芳一
題字　新居藍州

名水百選の江川

発行日　昭和61年4月1日

発行　鴨島町教育委員会
協賛　新とくしま県民運動鴨島町推進協議会
編集　名水百選の江川編集委員
印刷　坂東印刷所

非売品

吉野川市立鴨島図書館
4111062772 5